

求道

第拾四卷
第參號

大正七年六月十五日發行(每月一、四、七、十、十三、十六、十九、二十二、二十五日發行)

六 月 號

■ 一無碍道

■ 抵抗の人生と無我の救濟

■ 歎異鈔講義——第十三章

「具縛凡愚屠沽下類と二十一箇條帳文」

■ 信仰書簡

一 無碍道

○人生のすべての問題は、最後は信仰によりて解決されるのである。如何なる事件も如何なる出来事も、最後の歸結は信仰に入ることによりて、其最終の目的に達するものである。

○人生若し各自の立場に立ちて各種の方向に進むときは、其理想に従ふて其發展を異にして、極端に相背馳するに至るものである。然るに其立場、方向、理想の背馳するといふは、畢竟人間有碍の道を執るからである、一たび其有碍を離へして絶対無碍の大道に入るときは、恰も百川の大海に朝宗するが如く、渾然として一大和融海を實現さるるのである、是が信仰無碍の大海である。

○抑々無碍道といふは、曇鸞和尚の釋から來りたのである、曰く、道とは無碍道也、經に言く、十方無碍○此の如き無碍の一道に我等を歸入せしむるが爲に、如來は種々に善巧方便して、攝化隨緣したまふのである、我等は近時思ひがけない如來の善巧攝化の御方便に遇ひたてまつりて、感泣言を知らぬ次第である、去る二日弟常音の一子常爾が、かりそめの病から突然急變して、生後僅かに九ヶ月にして圓寂涅槃の雲に姿を隠してしまつたのである。

○抑々常爾といふ名を命したのは此無碍道の根源たる華嚴經の文から出たのである、曰く文殊の法は常に爾かなり、法王は唯一法なり、十方無碍人一道より生死を出てたまへり、一切諸佛の身、唯是一法身なり、一心一智慧なり、力無畏も亦然なりと、我長男を文常と命名せしより、將來同心一體となりて斯法の爲に盡せかすと、直に常爾と名づけたのである、殊に昨年已來病める母の危き日に生れて頗る安らかに産れ、且母の病も漸く持續せしかば、將來幸福なれかすと待設けつゝあつたのである。

人一道より生死を出てたまへり、一道とは一無碍道なり、無碍とは謂く、生死即涅槃なりと知るなり、是の如き等の入不二の法門は無碍の相也とある。

○如何にも十方の無碍人は、結局一道より生死を解脱するのである、三世十方の諸佛、無量の姿を現して攝化隨緣不思議なりと雖、諸佛各別の目的あるにあらず、相違したる理想あるに非ず、彌陀の淨土に歸しぬれば、すなはち諸佛に歸するなり、一心をもちて一佛を、ほむるは無碍人を讚むるなり、而して其無碍の一道といふは念佛無碍の一道である、惑染の凡夫信心發りぬれば、生死即涅槃なりと證知せしめたまふのである、讚に曰く、往相の廻向とくことは、彌陀の方便ときいたり、悲願の心行えしむれば、生死すなはち涅槃なりとある。

○通夜の晩に大無量壽經を誦しつゝある間に「自ら強健なるを以て人の敬難を欲す、天地神明日月を畏れず肯て善を作さず、降化すべきこと難し、自ら用て優慢して常に爾るべしと謂へり」とある、言々句句實に痛切我等が心を警戒せらるゝ聖訓である、而して我等が常爾に對する心持は、如何にも人生的に常に爾るべしと謂ひて、火宅無常とは言ひながら、知らず識らずの間に人生常樂の様に思ひなしたのである、然るに眞實の常爾は豈圖らんや病中ながら前日まで嬉々として快樂しつゝありしものが、忽然として人生無常の姿を現して如來常住の國に還りて、我等を導きて無碍の一道に歸入せしめ、生死即涅槃の無碍相を淵默無言の間に啓示してくれたのである、眞に我等を濟度せんが爲に、生死の菌林に遊戲して普賢の徳を修したのである、實に文殊の法は常に爾なり、法王は唯一法なり、人生唯南無阿彌陀佛の一あるのみである。

○人生のすべての問題は、此絶対無碍の南無阿彌陀佛

の一道に入りて、最後の光を見出すことが出来るのである、常爾の生れたるも死したるも、畢竟此南無阿彌陀佛の如來常住を知らせんが爲であつたのである、讚に曰く、南無阿彌陀佛の廻向の、恩徳廣大不思議にて、往相廻向の利益には、還相廻向に廻入せり、往相廻向の大慈より、還相廻向の大慈を得、如來の廻向なかりせば、淨土の菩提はいかゞせん、彌陀觀音大勢至、大願のふねに乗じてぞ、生死のうみにうかみつゝ、有情をよはふてのせたまふ、實に彼は嬰弱の身を現して生死海中に浮みつゝ、我等を昭喚して、大悲の慈航にのせたまふ佛の御使である。

○此に至りては何事も言ふべき言を持たぬ、されど凡情の悲しさ、恩愛はなはだち難く、生死甚だ盡き難し、かくすればよかりしものを、早く平常をすれば助かりしならんに、曰く何、曰く何、考へ來れば盡く是れ愚痴にして人間の力にて心に任せて自由に爲し得べきが如く考ふるのである、かくの如く考へ去り考へ來

曰く、一切の法は猶し夢と幻と響との如しと覺了して、諸の妙願を満足して、必ず此の如きの刹を成せん、法は電と影との如しと知りて、菩薩の道を究竟し、諸の功徳の本を具して、受決して常に作佛すべし、諸法の性は一切空無我なりと通達して、専ら淨佛土を求めて、必ず是の如きの刹を成せんと、かくの如き無常迅速の人生をあはれみたまひて、やるせなくおぼしめす、大親心をいたゞき奉りて、前なるものは後を導き、後なるものは前を訪ひ、西方寂靜無爲の城に入るばかりである、しかるに我等は人間有碍のはからひばかりを追ふて、生死即涅槃の無碍の一道を忘るゝものゆへに、此一道に方便引入して盡十方無碍の光明に一味になしたまふのである。

○今生夢の中の契をしるべとして來世のさとり前の縁を結ばんとなり、我後れなば人に導かれん、我先たば人を導かん、生々に善友となりて、ともに佛道を修せしめ、世々に知識となりて共に迷執をたゝんと、嗚呼

らば、心緒綿々亂れて盡くるを知らぬのである、是か人生有碍のはからひである、聖人は卵の毛羊の毛のさきにある塵ばかりも、作る罪の宿業にあらずといふことなしと仰せられてあれば、毫も我等の欲する如くならぬ人生である、所謂、人生常に爾るべしと思ふが間違である、如來は此の如き我等を知ろしめして、此の如く煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもて、そらごと、たはごと、まことあることなき有様を悲愍しまして、どこどこまでも見捨てたまはぬ御まことこそ、如來常爾の南無阿彌陀佛の一である、此に至りて愚痴無智の黒雲はれて、盡十方無碍の如來を拜みたてまつることを得るのである。

○嗚呼我等も皆此の如き無常泡沫の人生に、そらごと、たはごと、まことあることなき生活をたどりて、よしあしのはからひを繰返しつゝある、是如來の悲愍まします所以である、是常任無漏の淨刹を莊嚴して、我等を待受けたまふ大悲大願の起りたる所以である、經に

常爾は實に我等がための知識である、先達である、ゆめの世に仇にはかなき身を知れと、教へてかへる子は知識なり、我等は汝に導かれて大慈父大悲母の御もとに往生して、長へに共に如來常住の光に浴せん、南無阿彌陀佛。

慶しい哉心を弘誓の佛地に樹て、念を難思の法海に流す。深く如來の珍寶を知つて、眞に師教の恩厚を仰ぐ。慶喜彌至り、至孝彌重し。茲に因て眞宗の證を鈔し、淨土の要を據ふ。唯佛恩の深きを念ふて、人倫の嘲を耻ぢず。若し斯の書を見聞せば、信願を因と爲し、疑訪を縁と爲て、信樂を願力に影返し、妙果を安養に願はさん。安樂集に云く、眞言を授り集めて往益を助修せしむ。何となれば前に生れむ者は後を導き、後に生れむ者は前を訪ひ、連續無窮にして、願はくば休止せざらしめんと欲す、無邊の生死海を盡くさんが爲の故なりと。已上。爾れば末代の道俗仰て信敬す可きなり。知る可し、華嚴經の偈に云ふが如し。若し菩薩種々の行を修行せるを見て、善不善の心を起す有りといへども、菩薩皆な攝取せしむ。已上。

『親鸞聖人化身土卷末文』

抵抗の人生と無我の救済

近 角 常 観

近時種々なる御縁で私の話を聴いて頂く機会が多かつた。お聞き下さる種々なる御不審のあるお方も有らうし、又それらの煩悶を持つて居られる方も尠くなく思はれる。即ちそれらの皆様の一々の問題

大掃除するに、心中に持つて居らるゝ煩ひを、遣る處なく片つけて頂く心持ちでお聞き願ひ度いと考ふる次第である。處が眞個にこの大掃除するなることが極めて困難なる事柄にて、この會堂内の如きも何程綺麗に掃除した積りでも、光線が這入ると埃が見える。即ち宋當に掃除することが出来ぬのである。『心學童話』か何かになる掃除好きの男が一つ徹底的に綺麗に仕やうと思ひ立ち、障子の棧に至るまで布巾で一々拭き廻るけれども、何程綺麗に仕て見ても光線が射し込むと塵埃が見える。終には部屋中布巾を振り廻して、空氣中をばたき廻るけれども、ばたけばばたく程、塵埃が立つといふ寓話がある。我々も掃除せぬ間ほよけれども、多少眞面目に考えて仕出すと容易に仕切れることを發見する。眞宗信者の間に於て、『悪いまゝである、淺問しくてもお助けや』斯くいふて平氣で居る間は掃除仕度い氣が

無い間であるけれども、少しでも心懸けると、細々綺麗になりえざること、徹底的に残り物が無くなりえざることを發見するばかりである。時々いふ話であるけれども、禪家でも五祖門下に澤山の曇禪の弟子があつた。けれども細々一人の衣鉢を傳へる弟子を選ぶとなつて銘々が悟りの言葉を書き出すことになつた。その時神秀が書いて出した言葉に、

身是菩提樹
心如明鏡臺
時々須拂拭
勿令惹塵埃

身は是れ菩提を悟るべき器である。古來人身を受け無ければ法が開かれぬなどいふ。又心は明かなる鏡の臺である。時々須く拂き拭ふて、塵埃を惹かしてはならぬと言ふ、名高い言葉故昔人の知れる處である。それを見て門下一同流石は上足の弟子の言葉であると感歎したといふ話であるが、如何にも理想としては至極結構である。實際としては然らうか。こは一人々々に經驗があられることと思ふのである。信仰問題としては餘程眞面目に考えられるてなければ、一寸分り難い點なのである。

二

そこで何より言はんか、露骨にいふと信仰に於ては何でもを解決することが出来るのである。小にしては友人間の折合、家庭の調和、大にしては國家の治亂、世界の動亂に至る迄、俗にいふ何でもムれてある。如何なる問題でも信仰の問題に觸れざるは無いのであるから、何からでも話すことが出来る。併し妙なものて人は自分自身のことを言はれぬと自身に響ひかぬ。今自分が病氣で苦勞し、若干友人と折れ合は無いで苦める時に、滔々と日本思想界の問題で言はれても、それでは苦しんで居る所に中らぬ。故に信仰問題は人生如何なる問題にても影響せぬは無けれども、聞く方にする時は自身の現在に及ばぬと、自身に響いて來ぬのであるから、茲肝腎なる點である。即ち斯く一般的に聴いて頂くとして

私として最もこゝに苦心する。何れも皆様が夫れ々斯く多忙の時間を割き、斯く熱心に聴き、讀みして下さるのであるから、私としては皆様の苦しんでおいての處に充分適切に觸れるやうお話しなくては甚だ相濟まぬ。即ち今斯く茲で直ぐ不審をお出し下されても私

の方は毫も厭はぬのである。失禮ながら皆様の方には、茲聞き度いといふ處があられても、私の方が機會を與へぬと割合に出し難いのであるから、丁度今日如きお聞き下されたらよからうと思ふ。私の方は皆様が持つて居らるゝ諸種の煩ひを洗ひざらひ茲へさらけ出して、暫くても早く心らくになつて下さるやうにあり度いと希望する次第である。

三

全體近頃は何ういふことか、又一頻り信仰の機運が起つて來た感がある。近頃のは殊に内容的に盛である。初めて聴く人よりも、從來長い年月間法して理解了解の形であつた人が、何か實際問題で突き當りて、今更に驚きを立て、聞かれる人、又或人は多年の信仰の誤に氣がついて涙を流して聞かれるといふ有様である。先達て如きも道を求めて苦みて態々訪ねて見える人が一人來り一人來り、一日に十四五人。私は朝から晩までワン々々、終に晝、夕飯とも喰べずに夜十時過ぎ迄夢中に話して居つたといふ状態である。そうなるこそそれが或人丈けの惱みて無くて、全部の人の惱みが皆な同じことになりてある。世界の思

想の傾向も、眼前一部の思想の行き詰りを考へると、大體の歸向が察せられるといふ程にもあるのである。故に私の方から察して申上げてよいのであるけれども、今いふ皆様の方から自身の問題を出して聞いて下された方が一層適切に分りよい。往々中には『考えた上で尋ね度』といふ人もあるけれども、考えてから尋ねる位なら、尋ねるには及ばぬ。不審を尋ねて塵埃を出すと、出すなら立派な塵埃でなくしてはといふは、立派な塵埃なら出して掃除するにもあたらぬのである。全體從來眞宗信者間の聞き方が之になつてある。信者の尋ねるのが自分の眞實を打ち出して尋ねるのでない。ちやんと尋ねる定石を以つて聞いて居るのであれば、答へる方も定石で答へて居る。宛然禪宗の問答の形式をやつて居る有様である。聞くなり自身の本物で聞かねば何もならぬ。

昔江州長濱に横越院なる本願寺連枝があつた。風雅の道に心を寄せ

か話すと、その友は非常に興味を以て迎えてくれ、種々信仰に就いて話が出たのであります。その時友が言ふには私の言ふ如く總ての人が信仰に這入るとする時は、世界の人口は無限に増加する。又日本人だけが信仰に這入るとする時は、結果として日本が存立しえぬことになりはせぬか。然ういふ意味の質問が出たのであります。之に對して私丈の答へは仕て置いたのですけれど、斯ういふことは何ういふ事になるのでありませう。それはその人の問ひの出た精神を、理解して見れば可かぬ。その人は人類が信仰に入れば戦争が止むものとの考があるやうなのである。私はその考は是認せぬけれども、兎に角その人にはそれがあつたやうである。設えその人の考ふる如く戦争が止むものとして、人類に死は離れぬのであるから、戦争が無くなつたからとて、果して世界の人口は無限に増加するものであるか何うか。今次の大戦如き、結果として一時の現象として減ずる如くにあるけれども、一時さうあるとしてもそれが永久にさうあるものとは思へぬ。兎に角その人の考は戦争で人の種を減りがある。との假定から、進んで居るらしい模様があるのである。それは第一世界の者全部が信仰に入るといふ假定からがをかしいのであるけれども、今私として言ひ度いのは、さういふ總て信仰上の間違つた先方の前提を是認して答へて居ても面白くない。先づさういふ誤つた先方の先入から明に仕て行つた方がよからうと思ふのである。それはその人は信仰に入ると世界に戦ひは無くなる。又日本人だけが信仰に入つて戦ひを仕無くなると、設えは獨逸などが偉い勢ひで日本に向つて來る時に、日本人は立て無くなるやうのことになりはせぬか、その人の疑問はそこにあるらしく思はれるのである。――

られた人で、或時山へ茸狩に行かうといふことになり、折悪しく松茸が無くなつたあとであつたから、周囲の人が心配して他で購ひ來り、あちこちに恰も生えた如くに植を付けて作つて置いた、と連枝は杖の先きで端からボン々蹴飛ばして、『ホ、茲にも植えて置き居る、／＼』と、頗る不興氣な様子で『もう歸らう』といふことになり、歸らうとせらるゝと道に鬮の根株の間から、腐りかけたのなれども一本天然の物が頭を出して居た、『ウン、これは本ものである。これさへあれば態々來た甲斐があつた』と、ひどく喜ばれたといふ話がある。從來の信者の人の不審は植えた松茸である。植えて掛つたのでは、何程整うて居ても仕やうが無い。腐つて居てもへちて居つても本當に生えたのなら大に結構である。誰方でも大掃除の仕にくい處あれば、遠慮なくその有の儘を出してお聞き下されて宜しいのであります。

四

この時質問せらるゝ一青年あり。『問題が少しく繰返くなりませうけれども、私は早稲田の政治科に學んで居る者であります。先達て一友に私が宗教に就て考えて居ること』

『さうです。その意味で友人は言つたのであります。』
要するに戦争は益々なる行爲である。處が今信仰に入ると人間が絶對無抵抗にならぬ。處が無抵抗ばかりの世界なら都合よけれども、一方に大抵抗の者が現はれると、無抵抗の者はその犠牲になつて仕まふやうの事になりはせぬか。その人の問はそこにあるやうに思はれる。
『その友人は一人が信仰に這入るといふ問題は、總ての人間が這入るといふことを理想として考へなくてはならぬ。すると戦争が根絶する道理でなければならぬけれど、それにしても然ういふことが考へ得ぬて無いかといふのであります。』
然うてせう。その人の考は恐らく戦争が無くなるにしまし、その結果として人口が無限に増加する。すると茲に食物供給の關係が起つて、食物が不足をつぐるとすれば、矢張りそこで再び戦ひが始まるて無いか。即ち絶對の平和など人生に有り得ない、といふがその人の考えなのでせう。人類が殘らず信仰に入つて皆な菩薩の如くなり、食物なども有無相通じて地上に極樂を見る如くにゆけると考へるなら議論は無いのであるから。それをさういふ風に言ふは、如何に信仰に入つたに於ては、人生何處かに欠陥ありて、絶對の平和など有り得ないといふのでせう。
『さうです。さういふて私を意地地めたのであります。』

五

只今の質問で丁度よい問題が出来た。一見繰返しが如くして至つて眞地目な考え方なのである。頗る間接

なる氣樂な問題の如きも、只今の如く分解して考え、大に信仰の機微に觸れた問題なのである。それはその人の宗教観は、絶対に無抵抗にすることである。

飽く迄自己の利益を人に譲りて、トルストイの如く、人が上着を取ればチョッキ迄與へて、何處までも無抵抗にやり抜くのが宗教と、その人はこれに決め込んで居るのである。而して一方にはそんなにするとする

個人が成り立たぬ。個人が成立たぬと、同じく國家が成立たぬで無いかと、この矛盾を考へて居るのである。一方に絶対に無抵抗にするのが宗教と豫想して、而して一方に

人間は絶対に無抵抗にはなり得無い者である。設え無抵抗に成り得たとしても、天然の食物の有限はそこに必要上争奪の戦ひが起つて、已むをえず無抵抗にはなり得無い無いか。言ひ換へると

人間の本質として本來抵抗性のものである。設し人間が互に無抵抗に譲り合ふとしても、その爲め結局自分が死ぬてもよいならよけれど、人間が死を喜ばぬ限り人間は何處迄も抵抗性の者であ

戦争の爲めの戦争をと主張せぬのであるから、如何なる者も中心平和を欲求して居る。けれども如何せん相手が止めぬから此方もやらなくてはならぬと、即ち聯合國は

聯合國で獨逸が世界を勝手にするから自分の方でも防ぎをつけなくてはならぬ。獨逸は獨逸で今俺の方が手を引くと、聯合國が、潰すから自分の方も何處迄も

やらなくてはならぬと、乃ち兩方が向ふが、必死に戦を進めて居る、そのことが今の問題なのである。それを世間の事となさらずに、自分の内心の問題となさらねば可かぬ。即ち今の不審一つが總ての問題を代表し、これ一つが解けると人生總てが解決がつくことになるのだからこれ話を進めやうと思ふ。

序に今の質問をせられた方に、今のお言葉の模様では、信仰の結果として無抵抗を、貴君も是認したやうにあるが、そこが餘程注意せんならぬ點である。設え人生武器を捨て、外に商業の戦争もあり、極言すれば平和の戦争もあるのである。一つ話に、貝が天氣の好い日に大口開いて日向ぼっこ仕て居つ

ると、この兩者の矛盾の問題を語りて居るのである。これが詰りは、その人自分の心狀を語りて居ることになるのである。

五

これは我々無抵抗にした方がよい、争ふのはよく無い、和ぐのがよいとは、必ずしも宗教と言はず、何人も常識で皆然考へて居る。而して成る可く然う仕度い

けれども、一方には喰へずには生きられぬのであるから、必要上自活自營の爲めに、自分が喰へる爲には人を犠牲にし、他に打ち勝つて自分を成り立て、ゆかなくてはならぬとなつて居るのである。即ち何人もこの両面の戦ひがある。即ち人間の根本の

この精神問題の表現が今この質問となつて表はれた譯けなのである。これは何人も心中が必ず斯うなつて戦つて居る。故に我々心を清め度いとか、平和にあり度いとか、即ち今の無抵抗、無戦争、この世をして結局極樂のやうにあらしめ度いとは、何人も皆なそう希ふて居るのである。そこになると

如何なる主戦論者も、必ず平和の爲めの戦争をといふ、た。貝の親が『そんなこと仕て居ると人間の奴が攫へに来るぞ』貝の子が『その時は直ぐに戸を立てる』といふと『ナニ人間の奴は家ごと持つて行くから注意せねば』と言つたといふ話があるが、茲は餘程よく氣をつけなくてはならぬ點である。

七

そこで私共今の『自分の方は和がうとするけれど、如何せん向ふが戦ひを以て向つて来るから』と言ふ。も一ついふと私など

その考も初めからは起つて來や仕無つたのであつた。初めは唯自分の方が善くすることに骨折つて居た。初めは唯自分の方から飽く迄和がんとするには、人生平和の來やう道理が無い。人は何うあらうが、設し骨折り損であらうが、それが世の爲め人の爲めとあるなら、何處迄も身を捧げてやると、それでやつて居つたのであつた。これが皆さん家庭間よりも

寧ろ交友間などにあることなのである。私なども之て久しく友人に對し、宗教に對し、自分としては飽く迄献身的に遣つて居る積りて居つたのであつた。處が既に自分が出來て居る積り故、心中に於てそろ／＼人と比

較。す。る。こ。と。が。初。つ。て。來。た。例。へ。ば。何。か。自。分。が。非。常。に。骨。折。つ。て。こ。し。ら。え。て。居。る。最。中。な。ど。に。人。が。『。イ。ヤ。そ。ふ。い。ふ。も。の。な。ら。私。が。上。げ。ま。せ。う。』。ウ。ン。と。ん。ら。こ。ん。な。に。骨。折。る。で。な。か。つ。た。』。と。馬。鹿。々。々。し。く。な。る。と。同。じ。有。様。に。自。分。が。思。ふ。方。角。に。總。て。が。調。子。よ。く。運。ん。で。ゆ。く。な。ら。如。何。な。る。苦。勞。も。苦。勞。と。な。ら。ぬ。の。で。あ。る。け。れ。ど。も。此。方。の。思。惑。と。違。つ。て。人。が。妙。な。態。度。に。出。る。の。が。面。白。く。無。く。な。つ。て。次。第。に。人。と。比。較。を。立。て。る。考。が。強。ま。つ。て。來。た。こ。の。時。人。は。善。く。な。い。の。で。あ。る。併。し。自。分。は。正。し。く。や。つ。て。居。る。の。故。『。人。は。何。う。で。も。自。分。は。こ。れ。で。よ。い。』。と。斯。く。人。を。飽。く。迄。見。放。し。て。行。け。る。な。ら。事。無。い。の。で。あ。る。け。れ。ど。も。自。分。は。こ。れ。程。ま。こ。と。に。や。つ。て。居。る。の。に。人。が。『。』。と。人。が。自。分。を。認。め。て。呉。れ。ぬ。の。が。不。足。に。な。つ。て。來。た。即。ち。私。と。し。て。は。人。の。爲。め。宗。教。の。爲。め。と。自。分。が。犠。牲。的。に。善。く。仕。た。こ。と。が。人。に。不。足。を。起。す。原。と。な。つ。て。仕。ま。つ。た。の。で。あ。る。こ。れ。が。『。宗。教。だ。修。養。だ。』。言。ふ。て。る。人。程。よ。け。あ。る。こ。と。な。の。で。あ。る。

八

こ。は。異。な。話。な。れ。ど。も。自。分。は。眞。地。目。に。仕。て。居。る。と。い。ふ。考。の。裏。に。は。彼。奴。は。不。

は。何。處。々。々。迄。も。自。分。の。利。益。を。投。げ。出。し。て。や。る。の。で。無。く。て。は。徹。底。せ。ぬ。故。に。何。處。々。々。迄。も。そ。れ。で。遣。り。果。す。の。で。な。く。て。は。な。ら。ぬ。處。が。事。實。は。此。方。か。ら。二。三。度。讓。れ。ば。向。う。も。そ。の。意。で。返。し。て。呉。る。の。な。ら。禮。讓。が。供。つ。て。よ。い。の。で。あ。る。け。れ。ど。も。此。方。か。ら。讓。れ。ば。讓。る。丈。け。向。ふ。は。飽。く。迄。取。り。込。む。ば。か。り。で。更。に。此。方。を。顧。み。ぬ。斯。く。な。れ。ば。必。ず。行。き。詰。ま。る。に。決。つ。て。居。る。の。で。あ。る。茲。實。に。飽。く。迄。眞。地。目。な。ら。ん。と。欲。す。る。者。に。取。り。て。遣。り。難。い。所。而。し。て。理。想。的。傾。向。を。持。つ。た。人。々。に。あ。り。て。は。茲。我。々。絶。對。に。は。善。く。爲。し。切。れ。無。い。の。だ。と。の。こ。と。が。中。々。氣。づ。き。難。い。點。で。あ。る。そ。れ。は。人。間。絶。對。に。は。善。く。出。來。無。く。て。も。成。る。可。く。善。く。仕。て。行。か。な。く。て。は。な。ら。ぬ。と。い。ふ。成。る。可。く。論。な。ら。事。無。い。の。で。あ。る。け。れ。ど。も。成。る。可。く。論。で。満。足。し。て。居。ら。れ。る。程。な。ら。宗。教。の。救。濟。を。必。要。と。す。る。こ。と。も。從。つ。て。消。失。し。て。仕。舞。ふ。譯。け。な。の。で。あ。る。

九

入。ら。ざる。例。な。れ。ど。も。某。地。に。さ。る。富。豪。が。あ。る。代。々。金。を。貸。す。こ。と。を。以。て。家。業。と。仕。て。居。ら。る。私。そ。の。人。の。處。へ。或。時。講。話。に。參。つ。た。話。果。て。し。か。ら。主。人。が。言。は。れ。た。

眞。地。目。だ。と。人。を。見。下。し。て。居。る。思。想。が。あ。る。宗。教。聞。く。人。は。聞。か。ず。に。思。ふ。様。に。振。ま。つ。て。居。る。人。を。彼。奴。は。を。か。し。な。奴。だ。と。屹。度。思。ふ。て。居。ら。る。の。で。あ。る。す。る。と。向。ふ。も。『。何。だ。彼。奴。有。難。さ。う。に。』。と。屹。度。思。う。て。居。る。に。違。は。ぬ。の。で。あ。る。即。ち。此。方。が。『。自。分。善。い。彼。奴。惡。い。』。と。思。う。て。居。る。と。向。ふ。も。必。ず。然。う。思。う。て。居。る。す。る。と。は。や。そ。こ。に。人。生。善。し。惡。し。の。戦。ひ。が。起。つ。て。居。る。の。で。あ。る。私。が。今。い。ふ。理。想。的。に。獻。身。的。に。や。り。抜。いた。結。果。が。『。俺。は。こ。れ。程。善。く。し。て。居。る。に。人。が。少。し。も。認。め。ぬ。な。』。と。善。く。仕。て。來。た。最。後。が。人。に。こ。の。不。足。を。起。す。す。る。と。飽。く。迄。平。和。に。平。和。に。と。理。想。を。迎。え。る。こ。と。が。現。實。と。な。り。て。は。こ。の。善。し。惡。し。の。戦。ひ。を。起。す。こ。と。に。な。つ。て。仕。ま。ふ。の。で。あ。る。少。く。も。精。神。的。に。は。必。ず。起。す。こ。と。に。な。つ。て。來。る。の。で。あ。る。故。に。ト。翁。の。無。抵。抗。主。義。に。し。て。も。自。分。は。無。抵。抗。に。仕。て。居。る。と。の。考。が。起。る。限。り。絶。對。の。無。抵。抗。に。は。成。り。得。ぬ。の。で。あ。る。故。に。寧。ろ。宗。教。は。絶。對。無。抵。抗。な。ど。輕。々。し。く。承。認。す。る。こ。と。が。實。は。苦。ま。な。け。れ。ば。な。ら。ぬ。原。と。な。る。苟。も。無。抵。抗。と。考。え。た。上。か。ら。

には。宗。教。は。何。も。か。も。あ。一。なる。の。も。宿。業。斯。う。なる。の。も。因。縁。と。これ。で。は。我。々。の。家。法。が。成。り。立。た。ぬ。の。で。困。る。の。話。で。あ。つ。た。す。る。と。同。時。に。私。と。一。緒。に。そ。こ。へ。來。て。居。ら。れ。た。他。の。一。人。の。方。こ。の。方。も。そ。の。お。家。程。で。は。無。け。れ。ど。も。立。派。に。や。つ。て。居。ら。る。實。業。家。で。あ。る。主。人。の。言。を。聞。き。て。言。は。る。に。は。『。主。人。の。言。ふ。こ。と。が。分。ら。ぬ。宗。教。は。宗。教。世。間。は。世。間。で。よ。い。て。な。い。か。』。家。業。は。世。間。で。や。り。宗。教。は。宗。教。で。や。つ。て。差。支。無。い。話。で。あ。る。に。主。人。は。分。ら。ぬ。こ。と。を。言。ふ。』。と。の。説。で。あ。つ。た。け。れ。ど。も。こ。は。却。つ。て。主。人。の。方。が。眞。地。目。な。る。考。え。で。あ。る。の。で。あ。る。そ。れ。は。一。方。も。財。産。あ。り。て。少。し。位。人。に。慈。善。を。仕。た。と。て。影。響。の。無。い。身。の。上。で。あ。ら。る。か。ら。『。家。業。は。家。業。慈。善。は。慈。善。で。や。つ。て。よ。い。て。な。い。か。』。斯。う。い。ふ。考。で。あ。ら。れ。る。の。で。あ。る。け。れ。ど。も。主。人。は。根。本。原。則。を。考。え。て。居。ら。る。の。で。あ。る。原。則。と。し。て。は。人。が。氣。の。毒。で。あ。る。可。哀。相。で。あ。る。と。同。情。す。る。立。場。で。や。つ。て。行。く。と。な。る。時。は。金。借。る。程。の。人。は。皆。な。氣。の。毒。な。人。ば。か。し。故。自。分。の。職。業。が。成。り。立。た。ぬ。と。斯。く。考。え。て。居。ら。る。の。で。

ある。それは原則としていふ時は、如何にも兩立せぬといはるゝ方が本當である。獨逸があのやうに迄せぬかてよさうなもの、一應思へぬでも無けれども、原則より言ふ時は、何れ丈けても自家の都合よくなれる限りならねば可かぬのであかるら、勢ひ戦ひが起るとなつて來るのである。中位に、よい加減にごまかして通るなら事無けれども、本氣に考えると、寧ろ主人の言はれた處が本當となつて來るのである。

一〇

又我々飽く迄人に譲り善くしてゆくことが人生平和の源泉とする時は、それを徹底的に考察する時は、設え何程善く仕ても自分は善く仕たとの思ひがある限り、それは本當の善きことにはなつて居ぬのである。即ち何の方面より考へても、我々本當に善きことが出來るといふことは無くなつて來るのである。それを言ひ換へると、我々何程献身的犠牲的に勉め得たとしても、結局自分なるものが、根底に於て名利が捨てられて居らぬとなる。成る程利益欲しい名譽欲しいと表には考

えて居らぬども、彌々になると『自分が眞地目にやつて居る丈けは人から認められぬ』この思想が隠されて居る。私の友人で相當の地位に居る或る人言ふには、『自分は何事も遺言式にやつて居る。それは何事に着手するにしても、萬一の事あつた時、あとて人が自分の眞意を感ふやうの事が無いやうに、その事を初める前に自分の眞の精神を、家の者にちやんと言ひ置いてからやることに決めて居る』と。如何にも善いやうであるけれども、生前認めらるゝ事なくば死後になりとも認められぬいとの思想である。即ち何れ丈け自己を空しくすることに苦心しても、何うして外捨て易いのである。それは交換問題的に捨て、居るのである。『斯くすると人が善く思ふ、感心する』と、人から徳を取ること、交換的になら案外に犠牲に仕易いのである。けれども彌々人から認められ無くなると、もう行かぬ。そこになると人間は、一分一厘も他から認められぬとなる時は、溝へ身を捨てるのも選ばぬのであるから、もういかぬ。

茲になると私など、物質的の金錢など欲しくない、勳章など欲しく無い、評判など欲しく無いけれども、自分は正義で遣り居つたと、この一つ丈けは何處迄も得度いといふ、甚だひねくれた名利心になつて居つたのである。すると何處迄も自分が捨てられて居ぬのである。捨てられて居ぬ以上

本物で無いとなつて仕まふのである、

又入らざることを言ふなれども、先年私の處へ訪ねて見えた或る名高い修養家があつた。寒中に裸で鍛練するなど、精神的に身體的に、飽く迄眞地目に遣り通された方であつた。或時或人にその方のことを、『近頃は何うやつて居られるか』と聞くと、近頃は『何うやつた處が結局勝てば官軍だから』と言って居らるゝとの話、終に白狀して仕まはれたわいと思ふた事があつた。今日時代の惡弊たる

『成功者が最後の眞理だから』などいふ思想は皆なこれなのである。あれ程修養せられた人が、それまであと返りせられたかと、驚いたことであつた。その方は寧ろ私の言ふことなど、まどろこく不満足に考えて居られた方だつたのであつた。それが結局になると『勝て

ば官軍だから』それは窮極人生は獨逸が世界を統一して世界のカイゼルとなれば、それが勝ちであると考に外ならぬのである。

一一

話が色々になるけれども、只今いふ或金持の御主人の話を其の時そのお宅の番頭の人聞いて居た。今度は番頭が言はれたには、『今の主人の言つた處が自分達が一番苦心する處である。人に貸金を督促するのに、何も強いて返却して貰はぬかて此方の方が左程困るのて無い。而して反對に先方の困られることは明に見えて居る。この時先方が氣の毒なからとて、此方が譲つて仕舞つては此方の商賣が成り立たぬし、この間まことに心苦しく、自分達の苦心する處である』と。こは即ち先きの兩説の中間に位する説である。故に大に御最といふとよけれども、私根性悪くそう言はぬ。それは貴方の金で無い故、そんなこと言うて居れるのである。設えは茲に貴方と私と共同の壽命が百年ありと假定する。私が一年生き長らへるとあなたの壽命がその爲め一年縮まら

なくてはならぬ。すると人を生き長らへさす爲めに、自分の壽命を一年犠牲にすることが出来るか、何人もそうは敢て仕えぬのである。即ち主人はそれに考えて居るのである。氣の毒なからとてこの人にも一年、彼の人も一年、それでは自分の生命が無くなつてしまふて無いか」と申したことであつた。即ち原則的に言ふと私の貧乏飽く無き精神と、飽く迄人を生き長らへさす宗教理想と、事實に於て戦ひの問題になつて居るのである。即ち我々の解決を要求するは、實は

これの解決を任せて欲しいのである。そこで茲で直ぐ佛を持ち出すと大に都合よけれども、茲で先づ大に考へ無ければならぬは、即ち斯く人を犠牲にしても自分が何處迄も生き長らへ度いといふ。故にこの煩惱は、我々之を離れては必然的に自分が成立しえ無いのであるから、煩惱の儘思ふさまやりてよいか。否。人生それではいかぬ故、理想を辿らなくてはならぬとなつて居るのである。けれども辿るも我々の根本がその煩惱故、何程努力し苦心しても結局本當に辿り切ることが出来

と奨励する、してその一方に修身では「人と争ふ勿れ、譲れ、平和にせよ」と教える。私などいづそ出来る數學でも態と出来ぬやうにして、人に勝たせるやうに仕なくては可かぬでないかと考へたことさへあつた。即ち何うしても人間にはこの矛盾がある。して茲理想を高くすればするだけ、反對に彌々苦まなければならぬ點なのである。

二二

茲で私の思ふ儘のことを言ふと、西洋の道徳は茲で飽く迄自分を主張し、何處迄も我慢張りでゆくことになりてある。ロイド、ジョーデでもウイルソンでも、今次の大戦に就きて飽く迄理想を高調して、正義の爲め人道の爲め殉教的精神で戦へ」と言ふ。斯ういふ風の言ひ方が西洋人には兎角多いやうなのである。而して斯く飽く迄正義を追い神を追ひて戦ふのである故、即ち何時迄もこの戦が止まぬ。これが人ごとでなく、私など最も困つた點なのである。『自分は何處迄も正しくやる、正義の爲めにやる、人の爲めにする』と、斯く眞地目に考えて居ることが、結局

一六
ないとなつて居るのである。即ち利益を捨て、も名譽は欲しい。名譽は捨て、も理想は欲しい。理想は捨て、もせめて死後の名は欲しいと、斯くなつて居るのである。こは一人々々の實際問題に當てはめて考えて頂き度いのである。

故に私は基督教の

『汝の敵を愛せよ』といふ教は、甚だ俗な見方であるも、人との争ひに於ては何處迄も人に譲りて人に負けて居れ、負けるが結局勝ちだとの思想になると考へる。何處迄も愛するのであれば。負けた丈けてよささうなものであるに、その負けたのが結局正義を辿つたのである。勝つたのである』といふことに仕て置き度い。即ち自分自身の身が可愛い故結局そこへ持つて行つて自ら慰めやうといふのである。即ち如何に人に譲るのだ、負けるのだと、理想的に勉めても、事實自分が負けざりては自分の心が得心せぬ故、結局勝ち度いにと戻り仕て仕まふのである。愚な話であるけれども、この點につきて私中學時代に成績のことに就て一つの不審があつた。即ち成績の上では學校は人に『負けなく、勝て』

『俺は善くするぞ』と我慢張りで居ることに過ぎなくなつて仕まふのである。最後に如何にも情け無くなつて、友人などが氣樂に滑稽言うて笑つて居るのを見ると『あゝいふ風に氣樂に仕て居る人の方が、何れ丈け自分より無邪氣であるか知れぬ。自分など宗教や信仰ぢやいふて、自分ばかりが正しいものゝ如くいふて、多くの人を傷つけて居る、こは自分達如き者の方が、世間の何心無き人よりも、何程惡事を犯して居るか知れぬ』と考へたことであつた。けれども然らう思ふたとして、

自分の性分故止められぬし、止められぬ限り何處迄も人を惡しく見下し、自分を押し立て、ゆく事になりて何とも仕やうが無い。最後には人間この眞地目な問題があるに、人が滑稽いふたり、笑つたり仕て居るのが怪しからぬと、やはりさういふ人を咎め立てしてゆくと、斯ういふことになつて仕まつたのであつた。即ちこういふ心状であらるゝ人が青年者、殊に理想的に行はんとする人々の間に多いのである。即ち初めに言うた神秀の文、『時々須く拂拭して、塵埃を惹かしむる勿れ』——故に飽く迄綺麗に掃除せんとすればする程益

々出来なくなる譯けは分つたのである。

一三

茲て親鸞聖人が善導大師の『散善義』の至誠心釋の下にあるお言葉

外に賢善精進の相を現じて、内に虚假を懐くと勿れ善導大師の意味は、『外に賢善精進の黒の法衣を着たら、心もそれに合ふやうに黒の法衣、黒の袈裟で無くてはならぬ。表に賢善精進の姿を標して、腹の中に穢ないものを藏して置くやうのことをせよ』と。即ち之だと今の『塵埃を惹かしむる勿れ』と同意味で、我々には出来得無きことになつて仕まつてある。設えば念佛でも我々の人は、人はせぬに自分は稱えると、之になりて何うしても本當のことにならぬ。故に之では我々には可かぬ故

親鸞聖人は讀み方をかへて外に賢善精進の相を現ずることを得ざれ、内に虚假を懐けばなり。

私は綺麗ながことが出来ますといふ風を仕てはならぬ。

たとひ牛ぬす人とはいはるとも、もしは後世者、も

である。動もすると他力信者の間には、之を以て直に安心の如く誤解して居る人がある。それだと即ち『悪いま』である。悪い儘では仕やうが無い。私が已上申したのでも、結局我々は綺麗になり得ぬのである、如何しても理想は通り得ぬのであると申した丈けのことであるからこれ丈けに畢つては何にもならぬのである。

一四

すると茲て我々何うするか。茲は私のあつた心持ちで言ふ。以上申陳ぶる如く、私如何にしても争ひの心を止めることが出来ぬ。それも私のは争ひなどいふ粗々しき言葉では言はずに

隔てるといふて居た。『彼は自分を斯ういふ風に思ふて居らぬか、彼れは自分を斯く考えては居らぬか』といふ、疑ひ隔ての心が止まなかつたのであつた。故に私はト翁の無抵抗主義は無理な教だと考える。最もトルストイにしても唯無抵抗にせよと言つたのではあるまい。ト翁にすれば夫れ丈けの實驗ありて言はれたのならんが、トルストイ自身は實驗があつたかも知れぬ

しは善人、もしは佛法者とみゆるやうにふるまふべからず。(御文)

何故となれば、内に虚假を懐いて居るからである。斯うなると

遣憾無く徹底して仕まつて居るのである。即ち之が他力信仰に於て罪惡觀の起る原である。こは禪家でも矢張り同じで、今の塵埃を惹くなくしては到底いかぬ故この時六祖慧能——大衆の中に雜つて米を舂いて居つた爺であつたが、直ちに今の神秀の文を書き直して

菩提本非樹 明鏡亦非臺
本來無一物 何處惹塵埃

身は是れ菩提樹とするから六かしくなるのであるも、何も菩提が樹な譯けてなく、又鏡が臺である譯けて無い。『本來無一物、何の處にか塵埃を惹かん』物の無い處に埃の着きやうが無いかと。併し私には茲禪の提唱は出来ぬ。此方が絶対の悟にゆけてるので無いのであるから。併し茲に注意せねばならぬは、我々『何程清淨にならんとするもなりえぬのである、何處迄も内懷虚假の煩惱具足の身であるから』と、此方の虚假不實を言うてる丈けては安心にはならぬの

も、それを直く持ち出して故に人にその如くせよといふた教訓は確に無理である。寧ろ私としては眞實無抵抗にせんとするも、それが本當に出来得無い爲に、そこで苦しんだのであつた。併しこゝは『だから出来無くてよいのだ』と聽いて貰うてはならぬ。否な眞實にする爲めには我々何處迄も無抵抗であら無くてはならぬ。修行戒行、有らゆる道を求めて飽く迄も自ら眞實に仕なくてはならぬのであるが、如何せん、それがせんと努めれば努める程出来無くなるばかりであるといふことを申したのである。

そこで我々如何しても抵抗が止まぬ、無抵抗になれぬ。即ち何處迄も抵抗性の自分である。それは自分に對し先方から争ひ隔て、向つて来る者に對して、争ひ心が出て来るといふならば、まだ聞えるけれども、先き言ふ如く何心なく居る人に對しても、最後には善し惡しの隔て心で向つてゆく自分である。即ち隔てぬ人に對しても、隔てゝかゝる自分である。如何な

無我人に對しても我は何處迄も之に反撥する程の我慢
な性分の自分であるとなつて來るのである。茲迄
自分なる者が見えて來ねば、宗教としては本當の話に
ならぬのである。これに行き惱んで居らるゝ人が、必
ず眞地目なる人々の間にはあらうと思ふのである。

一五

殊に氣をつけなくてはならぬのは、平素宗教などに
心を向けて居られる人などは、動もすると茲でうつか
り佛は慈悲故、我々
佛に對しては隔てをせぬ、抵抗せぬと思つて居らるゝ
方が多いのである。大抵の方がお話する時言はるゝに
は「先生には抵抗しませぬ、佛のお慈悲は有難く思ひ
ます」と。實は斯う思つて居らるゝのがよく無いので
ある。我々一方五分々々相互の人間には争ふが、佛と
か同情者とかには隔てぬと言ふて居るは、實は佛は優
しき方と考ふる故、
優しきには優しく向つて居る迄の事で、即ち優しきに
は優しくする丈け、隔てるには隔てるとなつて居るの
である。即ち優しきには優しく向つて居るそのことが
實は隔て心の本である。茲最も了解し難い點である。

ある。茲極めて肝腎な點なのである。

一六

それは我々誰しも初めは、
善し悪しは相對する相手の人の如何にあると思つて居
るのである。處が段々考ふるに
善し悪しの隔ては實は自分の心にある。自分に隔てが
ある故接觸する誰彼れに「彼可かぬ、此れ善い」の問
題が起つて來るのである。彼れが善いとなるから、此
方が可かぬとなり、即ち善きを善しとし、悪しきを悪
しとするは、人間五分々々の思想に外ならぬ。故に
政友會は善けれども憲政會は悪いといふは、即ち一方
が善いとなるから一方が悪いとなるのであつて、即ち
善いと喜ぶのも悪しと斥けるのも、共に同罪たるを免
れぬ。處が動もするとこの心で佛を喜ぶことを以て信
仰と誤解して居る人が少く無いのである。即ち
「人間はいかに佛は有難い」——之を以て信仰と思
つて居らるゝ。處が嚴肅に考へると寧ろそれよりも
さういふ風に心を取つたり置いたりする此方の心の好
悪が可かぬで無いか、との問題になつて來るのであ
る。するとさういふやうな何處迄も人に好悪をつけ、

此間も或人に「私に對しては何うですか」「イヤ先生に
對しては隔てませぬ」「何故隔てませぬか」「先生は隔
てを取つて下されませんから」「爾らば私が取つて上げる
故、他に向つても無くなれやうが」「イヤ人にはある故
然うは出來ませぬ」と、結局斯ういふ話になつて仕まふ
のである。いつかも京都で慈善病院を經營して居らる
ゝ或方が「何も人に禮言うて貰はふとて治療してやる
ので無けれども、折角直してやつても人が忘れた如く
挨拶もせぬ時は、やはりひどい奴だと斯ういふ淺間し
い心がある」と仰しやつた。私「それも淺間しいてせ
うが、併しその反對に禮言はれて喜ぶ方の心は何うか。
言はれて氣持ちよいのはやはりそこに何物かあるから
で無いか。すれば矢張り同罪ではありませぬか」と申
上げたことがあつた。注意をせぬと、
「人は善く無いけれども佛は有難い」といふて居る、こ
れが矢張り同罪なのである。今日の宗教に實は
教派の如何を問はず之が多くて困るのである。之であ
慈悲を言つて居る人が多い故、却つて今日では
如來が人に當てつけの道具になつてある。佛を喜ぶこ
とが、人がよくないと不足いふ意味になつて居るので

分け隔ての止まぬ怖ろしき心の自分である。

「この心を打ち明けたら、如何に優しき心で我に向つ
て居て呉れる者も、必ず呆れて愛相を盡かすであら
う」と、結局この問題に出て仕まふのである。する
と茲になると、もう人間仕やうが無い。即ち
私の話は茲一つが要點なのであるから、茲は能く味つ
て頂き度いと思ふのである。

一七

私の處へ自分が悪しくて困ると、救ひを求めておい
でる程の方は、皆な茲に行き詰つて惱んで居らるゝ方
である。四方八面最早や自分が據り所無くなり、「唯佛
丈けは何處迄も見下されるのであるから有難い」と。
成る程之で一時の氣休めは出來る。「併しその貴方の喜
んで居らるゝ佛が
貴方のこしらへもので無いか」と言はるゝなり、思
つて居つた佛も何處かへ消えて仕まつて、殘るは唯不足
の心ばかりとなつて仕まふのである。かつて或人が「近
角の處に行つたとて、此方の心が苦しいから、何もな
らぬ」と言はれたと聞く、寧ろそれが本當である。「苦
しいけれども寺院へゆくと有難い」は、

寺院の風呂場で温つて来る信仰故、寧ろそれになると宜敷く無い。それは宗教は慈悲故、慈悲と言はるれば有難いと思はるゝは無理無い。けれども寺院の門外一步を出ると、『慈悲は有難いけれども、世間はひどいな』すぐそれになるは風呂場を出たから冷えて仕まつたのである。全體

他から優しく褒めて貰つたのを喜ぶのは宗教で、人に悪口言はれて腹立てるのは罪惡だとのことが有る筈が無い。第一褒めて貰つたと喜び自惚れて居るから、悪口言はれて腹立てなければならぬやうになるのである。すると茲に於てもう皆様の方で言はる可きとは無くなつて来る。兩三日前にも或方が私何程申上げて、『イヤ私は駄目です、先生何程言うて下されても私は到底駄目です』殆ど私の言ふことを聞かうとせられぬから、私は怒つたのであつた。『私が褒めてゐるのなら、イヤ駄目々々といふことも有らうけれど、私が貴方可かぬと言ふて居るのに駄目々々といふことは無いでなにか』と。それが早や佛と言はれると思ふと、ちやんと心の底に自分が善い者になりて聞く隠れたる思想があるからし

てそうなる。我々の思想には自分が慈悲が有難いといふ時は、それは當り前の人なら自分が善いと思ふて居る處であるも、それを、我々は罪と感じて居る丈けよけ善くなつて居るとの考が匿されてある。即ち罪々々と、罪を表面に押し立て、居る丈け、本當には却つて罪と思つて居らぬのである。

一八

昨日も第二求道會で昨年の夏季求道會で聞いて下された或人——その時は自分は斯く／＼の考でやつてゆくと言はれたから、私はひどくやつつたのであつた。にも係はずその方は腹も立てずニコ／＼仕て居られたのであつたが、昨日遇ふとそれから二ヶ月程経ちてひどく思ひ當つたことがあつたといふ話であつた。自ら満足して喜んで居られる人に、その喜んで居られるのが虚事であるとは甚だ言ひ難い。それは先方にいやがれる事であるから。けれども言はずにはあらぬか、言つたのであつたが、その時は分らずに、あとで氣づいて貰へたとなつたのであつた。故に皆様も、『今茲で氣づかねばならぬ、茲で分らぬと最早や駄目』とやうに思はれぬやうに。全體

諸君が何故斯程迄に信仰を尋ねられぬばならぬのであるか。眞地目の諸君は日頃周囲から『彼の人は感心な人』と評判を受けて居られるに違はぬのである。少くも自ら自分は正義を立場に仕て居る者とは考えておいてになる。故に露骨に言つて、『他から日頃そんなに善く思はれて居て、今更こんなになつて困る／＼』との苦しみになつて居るのである。もつと露骨に言ふと、『自分は何うてもよきも、これ迄人に善く思はれて居て、今更斯くなりては自分の立場が無くなりて困る々々』と。こは現に私が宗教の爲めぢや、佛敎の爲めぢやと、遣る丈けの事は遣り、人にも然ら思はれて居て、自分が行きついたのであつたから、私はそれに苦しんだのであつた。自分の心も改革せぬといつて、宗教を改革など何言うて居つたかとなつたから、私はこれで立て無くなつたのであつた。

處で茲までお話すると皆様がこゝで最初に言ふた『一つよく考えて見まして』之を言はれるからいかぬ。考えがつか無いから、聞きにおいでになつて居るのである。茲で平日聞いて居る敎化を引つ張り出して、皆様が我と我が心に『こゝを見て下さるのである、こゝを

やるせなく言うて下さるのである』と、當てがつて見て喜ばうとせらるゝ、それが甚だ宜敷く無い。寧ろ茲は作い達をせずに泥水の有の儘を出して下さるとよいのである。すると私は初めて歓迎する。『イヤその通りである。私自身が現にそれであつた。それが人間の極端に人に抵抗する根性である。飽く迄人に隔て、ゆく性分である。如何にもこれ迄の正義面は虚偽であつた、虚榮であつた、名利の心の外になかつたのである』と。即ち和讃の是非しらず、邪正もわかぬこのみなり、

小慈小悲もなければ、名利に人師をこのむなり。茲になると、最早や今迄の自分が眞實にする、善くするの原則ではいかぬことになつて仕まつたのである。

一八

すると茲で今一つ隠れたる思想がある。即ち先きの『自分が斯うひどい、偽の心であつては、自分が引き下ら無くてはならぬ。自分が斯うひどい淺ましい心では、人があんな奴いかなと思ふに決つてある。如何に優しき慈悲ある人でも、この怖ろしき心を出せば必ず逃げ出すに決つて居る』

と。これが自分に氣づかぬけれども、ちやんとこの時
心中に出来て居るのである。そこで
斯ういふことが欲しくなる。それは「何うかこの悪い
のを、これを買ひかぶられたのでは困る。買ひかぶら
れて居るのでは苦しいから、寧ろ言うて仕まひ度い。
併し言ふと必ず人が呆れて愛想つかすに決つてある。
哀はれ誰か一人茲に自分が斯ういふものであることを
理解して呉るゝ者はあるまいか。自分がこれ程心を掃
除し度いと努めても、如何にしても
仕されざるを認めて呉るゝ人ありて、その出来ぬ
のではいかぬぞと言はずに、その出来ぬ處に涙を持ち
て、この出来ぬ自分をば何處迄も捨てずに、汝が偽
りなれば偽りなる丈け、その偽はりにしかゆかぬ處に
同情するぞ、呆れぬぞと、言うて呉るゝ者は無からう
か」と。茲が甚だ
分り難い點なのである。

全體我々信仰の言葉として、佛は清淨眞實である。
我々は虚假不實であるといふことをいふ。その佛の清
淨眞實なる意味が、今日大抵の方の理解に於て、我々
の虚假不實と、恰も

手にやり給へ。僕は決して夫れによりて君を何う斯う
思はぬぞ」と、斯く飽く迄隔てず優しく向はるゝ人の
同情に遇ふ時は、我々
此方より無抵抗になるので無い。此方よりは如何程善
く仕やうと思つても出来ざる抵抗性の自分であるが、
此方が抵抗でゆけば世間は何う来るか。何處迄も抵抗
で報はるゝ世の中に、哀はれ此方が抵抗の止まぬのを
同情して、その抵抗の私に
何處迄も無抵抗に仕て呉るゝ眞實者が一人ある時は—
飽く迄絶對に無抵抗にして呉るゝ一人がある時は
如何な抵抗性の我々も
それには無抵抗にならずには居られぬで無いか、とい
ふ茲が六かしい處なのである。

二〇

設えば我々氷の如き冷却せる心である。氷ならば誰
にあつつけても冷いから、觸るゝ處の者、寄りつく程の
者が皆な冷い寒いと遁げ出してゆく。それは厭がられ
るが最であるが、その中に一人がその氷を見て、——一
人がその狂人を見て、——狂人が來たと遁げ廻はる者
ばかりでは仕やうが無いが、その中に一人「あれは自分

白い黒いを並べたやうの言ひ方になつてある。我々は
黒いが、佛は白いから有難いと。若しそいふ我々の
黒いのを對して、佛の白いのが眞實なれば、それ丈け
益々我々の黒いのが目立つ結果に了つて、それでは我
々の黒いのが救はれたにならぬ。今
眞の清淨眞實は何うかといふに、そいふ我々の黒い
のに並べて白いといふ白いので無い。我々の不實の濁
つたのに並べて清淨だといふ綺麗なもので無い。我々の
方からは如何程不實の濁つたので濁さうが、
向ふの清淨さは何れ程でもその濁りを引受けて、その
濁りに濁されざる無碍の清淨さである故に——我々此
方の不清淨不眞實を以ては絶對に濁す能はざる程の清
淨眞實である爲めに、終にそれ此方が救はれるとな
るのである。即ち今の私の汚い心、抵抗の心、打ち融
んとしても打ち融けざる隔ての心、それを先方は飽
く迄理解して呉れて、「イヤそれは君の性ぢや、性格
ぢや、僕は君のその何程思はれても善く出来ざるそ
こを認めたのである上は、如何に君が刃向はれやうが
隔てられやうが、それを毫髪も悪しとは思はぬ、同情す
る。成る程善く思へぬ、それは君の生れつきぢや、勝

の舊友である。境遇が苦しかつたばかりにありぬ氣
の毒なことになつたのだ。同情に堪えぬ」と、その狂
ひを理解して呉るゝ者が現はれたとする。或は又盗人
の場合にする「ソレ盗人が來た、取られぬやうに物隠
せ」とやるゝばかりならば仕やうが無いが、中に一
人「ア、あの者もあつては無かつたのであるが、或事柄
からしてあつたのだ、成る程あつたれば世間殘ら
ずの者が悪しく思へやうども、疑へやうども。寧ろ自
分はあつた冷かに思へるやうになつた處に同情する」と、
その盗人の冷かさが融ける處まで同情して呉るゝ友人
が現はれて來て呉れたとする。こは盗人狂人など例に
出したは斯ういふ例によるて無ければ、我々の心の働
きが盲く言へぬからであるが、今我々が佛に對しては
難有い、先生に對して優さしくする。併し人に向ひて
は善く思へ無し———そいふ識別がある位ならば、
我々は狂人ではあらせぬのである。

又變な話を持ち出すが、私學生時代に或友人が狂ひ
になつた。それを他の一友が見舞ひに行つた。その入
頭部に或の特長がある人なので、日頃友人間で變な異
名をつけて呼んで居つた。何心無くその人見舞にゆく

と一方は狂ひである故、甚だえらい調子でその人の異名を呼び立て『イヨ何々公、よく来た』などよい氣でやつて居る。行つた人には何の事か分ら無いが、話を聞くと、外の者には能く分る。『成る程そんなに迄なつたか』と涙こぼしたことがあつたのを覚えて居る。又非常な秀才で何方面でも能く出来た或友人が日露戦争で頭部に負傷し、それが原で頭腦に異状を來して變な状態になつた。此の會館落慶式の日招待した處が、取り違えて一日前の日にやつて來て、來るなり塗り立てのペンキに行き當り、着物を一面汚して『ア、』とやつて居る。その状見て『あんな人がこんな迄なられたか』とぞろ同様に堪えなかつたことがあつた。我々『隔てを止めやう、打ち解けるやうに仕やう』——腹一杯思つて居るのであるけれども、如何せん自分自身が根底から隔ての人間、人見れば誰彼れ無しに隔て、かゝる狂ひの私、その如何とも仕やうの無いのが同情に堪え無いと、その狂ひをばいかぬと言はずに、その氣の違つて居る處が可哀想と向つて呉れる、この同情を聞かねば我々腹のふくれる期は無ないのである。而して

時は哀はれ不具と生れついた爲め人から排斥され、輕蔑せられ、肩身狭く苦しんで居る子供の心中が可哀想で、それはよく無いから捨て、おくことが出来ぬのである。即ち私共隔てが止められ無い、無抵抗に出来得無い、——出来たら我々は不具とは言はぬのである。そこになると如何に信仰に這入らうが、喜ばうが、我々煩惱は止まぬし、無抵抗にはなりえ無い——それを善くなれることと思はれたら大變な間違ひである。それは生來故何とも仕やうが無いが、その仕やうが無い故世間から排斥せられ、結局迄肩身狭い思ひをして予らなければならぬ。その仕やうが無い不具の身故、その不具が可哀想と、その者に佛の御眞實は飽く迄深いとなるのである。そこで私共そういふ御眞實でましますことを知らせて貰ふと、『この不具をそれ程迄に哀はれみ思召し下さるお心であつたか、難有い』と、こゝで佛のお慈悲は今の白と黒とを並べたことで無くなつて來る。即ち佛の清淨眞實は私の清淨不眞實の濁り水であることを飽く迄哀はれみ思召され、その濁りを何處迄も清よめに清

その同情者が即ち佛である。といふ私之が欲しくてならなかつたのであつた。而して仕舞ひには、私は自分が善く成り度いといふ思想は最早や無くなつて仕舞うた。唯『哀はれこの仕方無くなり果てたこの私個人を哀はれと見て呉る、人が一人あるまいか』とこれが、唯一つ私の望みであつたのであつた。而してそう思つたなりに半歳程の間分ら無いで空しく過ぎて居つたのである。

二一

處が常にお聞き下さる如く、私は病氣になつて、病後、それ迄は悪うてもお助け下さるが佛とやうに聞いて居つたのであるが、私は悪うてもよいでは安心出来無つた。悪しくて困るから私は苦しんだのであるから。處がその如何程思うても善くなれ無い、そこを見てその善くなれ無いのが哀はれと現はれて下された御眞實の方が佛であるといふ、こゝに私は氣づかして貰つたのであつた。こゝが味ひのある處である。設えば不具の子供を親が可哀想であると言ふ時は、『不具でもよい』といふ意味は毫厘も無い。親から見

め、終に清らかにされて仕舞ふ迄、清め盡くさうと、その者に何處迄も清淨な水をつぎ込んで、飽く迄呆れず向うて下さるが、佛の清淨眞實である。それを青年の方などは、動もすると、佛といふと、自分の濁り、罪惡とは離れて、何か或る嵩い者を向ふに眺めて、寧ろそれに自分の方を當てはめることのやうに取つておいてになる。我々は當てはめるどころか、到底善く出来ぬ、寧ろ反對に惡魔、争ひを好む、如何にしても抵抗性の止まぬ、怖ろしき濁つた心の私である。爾るに今佛は私のその濁りを哀はれませ給ふが故に、その濁りに對し、如何に此方からは濁して懸らうが、その濁り性分が哀はれ、と、飽く迄其の者を斥けず、益々優しき心で向うて下さる、即ち佛のお心が清淨なとは、そういふ綺麗さでましますのである。これは注意をせぬと眞地目なる人達の間には、却つて宗教の爲に苦しんで居られることすらある。それは宗教にいふ絶對を理想視して居られるから、そういふことになる。否此方は理想どころか、何處迄も隔ての止まぬ者、その爲にその止まぬ處に同情して、隔

てる私に隔てず、何處迄も眞實無碍を以て向うて下さるが佛である。そこで如何に私の隔ての奴も、『そこ迄言うて下さるのか』とそれを知らされた一念に、その佛の無抵抗の爲に、如何に抵抗性の私も、自分の抵抗の性格を打ち消して仕まはれる處が現はれて来る。聞いて頂かんならぬは茲である。皆様がお尋ね下さる處あれば、茲であらうと思ふのである。

二二

それは我々『佛が無我であらるゝから、我々も無我にせねばならぬ』と、そういふことであれば、我々一言も無い。向ふが如何に在られやうが、此方は何處迄も冷かな性分の私であるから。よく世間にもあることである。一方が非常に荒んで居る時に、一方が何處迄も理想的に向つて来る、荒みて居る者の方は、よけ抵抗し度くなる。處が此方はその如く何處迄も反抗てゆくのには、『イヤ君の然う思へるところが氣の毒である。如何にもそう思へるだらう、自分も覺えがある、最ぢや、少しも思ひと思はぬ。』飽く迄同情て向はれる。『イヤ貴方がそう言つて呉れたとて、そんなことで、俺

の心の缺陷が埋まるものでない。あのやうに同情して居て呉れても、俺の心がこの冷かさだもの、結局は先方もイヤになるに決つて居る』と、此方は飽く迄も隔てなく。すると佛は『イヤ、汝の然う思ふのは無理無い。併し自分もとゞ／＼その冷かにしか出られぬ性分が氣の毒で、それを同情してかゝつたのだもの、如何に汝の方があらうが、何處々々迄も同情する』と、即ち善導大師が二河白道の譬喩に、『我能く汝を護らん』とある、『能く』の一字は、意味は茲にある。茲は諸君が私の話を聞いて、一人て考えられるのでは容易に分らぬ。矢張り直接私と語め合はれなくては分り難い所なのである。

動もすると茲て佛を一口に呑み込んで、『佛は罪は如何ほどあつてもそういふ者を何處迄もお救ひ下さるのである』と、軽く分つた積りになつて仕まはれる人がある。それは自分免許で、唯そう思ふて居る丈けてあるから何もならぬ。茲は私の能くいふ傘の心棒が逆^{さか}に擴がつて仕舞ふ鹽梅に、彌々私共信仰に入る一念は茲にある。それは今迄は『淺間しくて

は可かぬ、悪しくては可かぬ』と、何處迄も可かぬ／＼で慈悲に抵抗して居るのに、佛の眞實は『悪いから可かぬては無いて無いか、悪いから哀はれと云うて居るので無いか』と。斯く言はれても此方は『どういふはるゝものの、然う迄言はれ、ば少し何とかならねば可かぬ』と、何處迄も傘をつぼめて遁げ廻はる。然るにその者に對して慈悲の方は『その可かぬが哀はれて、我はその汝を何處迄も捨てぬと云うて居るのでは無いか』と、一言仰せの御眞意に目が醒めて見ると、今迄可かぬ／＼と傘をつぼめて居つた奴が『そう迄言うて下さる不思議の御眞實でま

二三

ち『悪うてもよいのである、淺間しくてもよいと言はるゝのである』と、それなら自分免許である、お慈悲で救はれたにならぬ。又青年の方は『そういふお慈悲であつても、こう悪くては可かぬ』と、何ちらかといへば自らつぼめやう／＼とする傾きがある。茲は我々自ら擴げたのでゆかず自らつぼめたのでゆかず、その仕うの無きを何處迄も見捨てぬとの不思議の御眞實に引くり反された處で、始めて『斯る者を御助け』の眞實は頂かれるのである。處が肝腎の御眞實の方は捨て置いて、唯言葉丈けて『斯る者を』と、それ故折角の他方信仰味の言葉が甚だ浮いたことになつて仕まつて居るのである。

しましたのであるか』と、茲てポンと方角が逆轉して、傘の心棒が逆^{さか}に引くりがへつて仕まふのである。茲は實に意想外の處で、即ち『私のこの淺間しさを夫れ程に迄哀れみ思召す御眞實か』と、私の淺間しさが、お慈悲の深さに敗けて仕まふ、こゝが一念の要の處であるのである。處が多く茲で間違ふは、今の逆轉する處がお慈悲で逆轉したのならよけれども、大低が自分逆轉するやうに持つ行つたのであるから可かぬ。即

そこで少し言ひ過ぎになるけれども、私は茲で態と言ふ。我々人生相對根性の根は茲で切られて仕まふのである。私はその根を、この一念に根が斷れたのだといふ。即ち初めに言ふ如く、我々五分々々の抵抗性は何うしても止まぬのであるが、止まぬなりに畢つて仕まうのでは何にもならぬ。我々

何程努めても最後が、『結局勝てば官軍だから』と、これでは畢竟無意義である。最後は私のそれ程悪しきを、それを何處迄も哀はれみ下さるお慈悲の故に、その者に飽く迄呆れず優しく仕て下さる、その佛の不思議の無抵抗の故に、終に私の抵抗性が救はれて仕まふ。こゝが一番肝腎の點である。それは今日迄誰彼れが善い悪いと言つて居たのであるけれども、そういう風に何處迄も人に善し悪しをつけてゆく、それが元來自分の自性であつたのだ。それ故その性分て此方は誰彼に喧嘩でゆくに、一人その者に飽く迄無我の考を持ちて、何處迄も／＼その自分に同情で向つて來て呉れる。即ちその向ふの無我の爲めに、終に『そこ迄自分の爲めに無我に仕て來て下された御眞實であつたが、恐れ入りました』と、茲て私の我慢が折れて仕まふのである、すると我慢の折れるは、唯その人に丈け折れるのには無い。極言すると獨逸のカイゼルが、あれ程の飽く無き抵抗でやつて居るのであるも、若しやカイゼルに對し『汝何程暴方てやるも、その汝を哀はれみ思ふが故に、我は何處迄も

／＼と、何處迄も自分を主張して、我慢をやつて居つた、自分の五分々々が悪かつた』と、もう茲て喧嘩が出來なくされて仕まふ處が出て來るのである。即ち初めに言うた無抵抗の理想が結果としては茲て實現されることになつて來る。併しては私の方から無抵抗にせんとするのて無く、寧ろ何處迄も抵抗性の私が、無碍の佛日の普照に遇つた一念の時に、私の抵抗性の根本が無抵抗の日光の爲に融かされて仕まうて、私の心中に佛の無碍の御眞實のみが入り充ちて下さるから然うなる。こは現に私自身が人と争ひ心に満ちて居る時に、『そらいふ何處も争ひ心の私に對して、何處迄も無碍に向つて下さる御眞實』と、一念之に氣づかせて貰ふなり
罪障功徳の體となる、こほりとみづのごとくにて、こほりおほきに水多し、さはりおほきに徳おほし。今迄の不平不足が、不足の限り大悲の御眞實に満たされて、即ち事實に平和を實現することが出來る結果になつて來るのである。爾るに今日の宗教を説く者が、事實に於て

その汝に背かず、飽く迄眞實にするのだ』と、このどこ迄もの遣る瀬無き思召であることが知らされると、如何な抵抗性のカイゼルも、そらいふ思ひがけない御眞實であつたか、恐れ入りましたと、之には折れずに居られぬて無いかと申すのである。すると折れたは唯佛丈けにて無い。成る程今迄恐るべき野心の爲めに無意味の大兵を動かし、無益の殺戮を仕たことであつたわい』と、之が出て來ずにはあれぬて無いかといふのである。こは宗教は決して、人生やる丈けやつて、あとで風呂や温泉へ行くことて無い。心に眞心徹到の一念には、人生五分々々の争ひの根を断ち切ることが出來る處の宗教である。こは如何にも空想のやうであるも、設えは人と人と軋轢仕て居る時に、一人が信仰に這入つて『全く自分の方が悪かつた』となつた時に『併し君はそらいふも、君の方に理屈があるので無いか』と言つて見ても『イヤ理屈が有らうが有るまいが、何時迄も人を相手に彼是れ言ふて居たのが全く悪かつた。成る程形の上では自分の方が理由があるやうになつてあるかも知れぬも、今迄て然ういふて向ふが悪い

世界の平和、外交の上に力及す力ある宗教であること考えて居らぬ。それは世間の狀は世間の狀として、宗教を以てそらいふ世間に居る者が、風呂場にゆき温泉場にゆく、——即ちそらいふ慰安の爲めの宗教の如く考えて、實際に於て人生の上に大變革を起す處の宗教であることに響いて居らぬから、そらいふことになつて來る。こは第一私自身が名利心が深く、人一倍我慢の心のひどかつた私である。眞地目々々と言つて居たのであるけれども、それも本當の眞地目で無く、却つて人以上に複雑な名利心から作らつて居つた眞地目であつたのである。爾るにそらいふ私が最後に慈悲を知らせて頂いて、私自身が我慢がなくなつたのでは無けれども、斯ういふ我慢の私に何處迄も眞地目に、何處迄も眞實に仕て下される、その御眞實である事に恐入りて、初めて私の我慢の角を折らせて貰へたと、斯ういふことになつて來るのである。

二四

そこで言はなくてはならぬは、茲が從來他力信仰に於て甚だ迷ひ易いことになつてある點であるが、私は

明にいふ。茲て私共迷ひの根が断られて仕まふのである。之を言はねばならぬは親鸞聖人『信卷』に於て

断と言ふは往相の一心を發起するが故に、生として當に受くべきの生なく、趣として再到るべき趣無し、六趣四生の因亡し果滅す。故に即ち頓に三有生死を断絶す。故に断と曰ふなり。

即ちこれにて私共生死の根が断れるのである。こゝになると人は何と言はふと、確に迷ひの根は切られて仕まふのである。併し私は佛になるのだとは先きより一言も申して居らぬ。即ち私共五分々々の人間が、五分々々ならぬ佛のお慈悲に接した一念に、初めて迷ひの根は切らせて貰へるのであるが、併し根は切れてあつても生け花に猶ほ花の咲く如く、私共お慈悲に救はれてもこの世に在る限り煩惱の花は咲く。佛に成るといふ譯けにはいかぬのである。若し我々信の一念に佛になるのならば、淨土を御成就下さることは無いのである。それは何と飾り立て見ても、この世は相對有漏の世界、生死罪濁の娑婆である。即

ちその娑婆故、その娑婆で惱んで居る姿が哀はれと、茲に大慈大悲のお心が顯はれ、即ちそれより起つた本願、慈悲、淨土。而してその佛の絶對の淨土に我々を導く可く、無限の佛の同情の力で、廣大なる佛の眞實を届け、我々の迷ひの根をば断ちて下さる。即ち私共その佛の御眞實を頂く一念に、迷ひの根は切れて仕まふのであるけれども、私共肉體がこの世にある限り矢張り切られれば痛い。即ち私を殺しに来る者あれば遁げなくてはならぬのである。即ち何處迄も相對世界である。五分々々は止まぬのである。故に私共喰べるために商賈もせねばならぬし、國の爲めには戦ひもせねばならぬ。それは或はそういふ相對苦惱の有様を何處までも見て下さる絶對の御同情に遇ひ奉つたが爲に、私の敗けてはならぬ我慢心の爲に戦ふるといふ、それは或は取れるかも知れぬけれども、矢張りそういふ戦はんならぬことになる、その不具であるところを見て下さる御眞實でましますのである。それは私共何と考えてもこの世は何うしても缺陷の人生、即ち不具、手無し、足無し、――窮極は失望落膽に了るより他に道のありやうは無い。それは眞地

目に考察する時は、如何なる人でも必ずそこに行き詰る。然るに然うなる私を、その故に何處迄もお見捨て無き御慈愛であることを知らせて貰ふ時は、現に斯くの如き『淺間しき罪業にのみ朝夕惑ひぬる』私が、その

本願不思議の御眞實一つで十二分に満足して、相對生活させて貰ふことが出来るやうにせさしめらるゝのである。茲は親鸞聖人より頂くと、このお慈悲頂くばかりして、士農工商各その營みに安じて生活させて貰ふことが出来る。即ち先きの『外に賢善精進の相を現ずることを得ざれ、内に虚假を懐けばなり』――形の上に執る處の仕事を如何で無い。中心から虚假不實で塊つて居る私を、それを何處迄もお見捨て下さらぬ御眞實ばかりでましますのである。又聖人は善導大師が

須く眞實心中に作すべし。と言はれた須の學を讀み換えて眞實心中に作したまへるを須むよ。とお讀み下された。向ふから眞實で來て下さる、向ふ様の眞實心を須ひるのである。此方は汚いのであるが

その汚いのに遣る瀬無く言うて下さる眞實心を須ひさせて貰ふのである故、その汚いのが安んぜさせて貰はれるとなるのである。故に又聖人は『正信偈』に於て名高き御教化

不斷煩惱得涅槃

とお知らせ下された。即ち煩惱は断ち得ぬのである。成る程我々迷ひの根は断たれて仕まふのであるけれども、それは我々に煩惱が止み、無抵抗になし得るやうに成れるといふので無い。抵抗の私に無抵抗に仕て下さるは、佛の御眞實を頂くが故に、我々抵抗の人間が、淺間しき抵抗の人生に、安心させて貰はれるとなるのである。即ち我々相手が抵抗して來るからとて、仕方無しとは言へ此方からも抵抗してゆくは何處迄も淺間しき限りである。けれども然うなるそこを見て下された處の不思議の御眞實の下には、恐れ入つて、而も安心して淺間しい事ではあれども、即ち戦ふ可きには何處迄も戦へる。即ち設え骨を粉にし身

を粉にするまでも戦ひに戦ひ、飽く迄も思ひ切つて遣ることが出来るといふは、根本に於て根が切れてあるから、そうすることが出来るのである。他家の子なら思ひ切つて叩けぬも、自分の子ならそんな物を喰べてはならぬと、思ひ切り叱ることが出来る如く、何も無抵抗が理想であるからして、何喰べても黙つて見て居るといふのが必しも本當で無い。即ち取上げなくてはならぬ物は、詮え争うてでも取り上げなくてはならぬ。即ち我々この慈悲頂きたる上からは争ふ可きには争はんならぬの立場が信仰上から現はれて來るとの事を申すのである。こは併しこの世の煩惱生活に立場を興へる宗教とやうに輕々しき誤解を仕てはならぬ。寧ろこの世の迷ひの根を断ち切る處の宗教であるのである。迷ひの根を断ち切つて仕まはれるのであるが故に、煩惱の花は咲きながらも『煩惱を断ぜずして涅槃を得』即ち政治、實業、教育、宗教、勞働、有らゆる煩惱生活を營みながらも、その者が慈悲一つで安心させて貰はれる。併し茲は何うしても『斯る淺間しき罪業にのみ朝夕感ひぬる我等如き

の徒ら者を』といふ、この人生とかけ離れた處が無くてはならぬ。我々如何やうに考えて見ても生活は何處迄も罪惡である。けれどもその者が本願不思議に遇ひ參らせた自然の結果はこれになつて來るとの事を申すのである。

二五

併しそれであるからして、茲は勝手に思ふさま悪いこととして行くといふのでは無い。我々一度びこの遣る瀬無き御眞實を知らせて貰うて見ると、若しやこの慈悲ましまさずは、何うにも仕やうの無つた處の私が、不思議の御哀れみて安んぜさせて貰ふことを得たのである。即ちこの御眞實が徹底の結果は、

如來大悲の恩徳は 身を粉にしても報ずべし
師主知識の恩徳も 骨をくだきても謝すべし

即ち信後は感謝の生活となつて來る。即ちそこになると水の一口も佛の慈悲、農夫が鋤鉤執るも廣大の御恩徳が有難いといふ感謝の思ひからとなるのである。茲は親鸞聖人は信後に於てはこの稱へる念佛までが感謝の念

佛であると言はれて、務めの生活、義務の生活といふ意味は信仰に於ては毫も無いのである。處てその感謝が唯出て來るのて無い、感謝は御眞實の届いて下された自然の結果である。即ち護謨珠の投げ付けられて、あとへはね反つたのが感謝である。これでこそと御眞實で腹一杯充分となり、それが溢れ／＼て現はれて來るが感謝の生活である。即ち私共人生に來る總ての事柄を、この満足感謝の思ひからさせて貰ふ。それを結果から言ふと、即ち信念ある政治、意義ある戦争、確信ある實業となつて現はれて來る。併し之を言ふと青年の方は、その結果から先き攫えやうとせらるゝから可かぬ。成る程戦争すれば結果としては金鵝勳章が得らるゝ事になるであらう。けれども金鵝勳章欲しさに戦するとなつては可笑しな事となる。結果が欲しくて信ずるのは、寧ろ何時迄經ちても信じられぬ。そうでは無く寧ろ反對に、その思ふやうゆかぬに向はせられての無限の同情、無限の恵み、慈悲、眞實でましますのである。而して之が我々の心に到り届いて下さるなり、この私の仕やうなきをそこ迄思召し下さるのか、恐れ入りましたと、

之で初めて私共我慢の根底を碎かれて、お慈悲の深きに腹一杯満足させられ、即ち最早や他に求むる處無くなつた處から、自然に眞實の生活、感謝の生活が表はれて來るとなるのである。信仰の上から現はられて來る節義、節操といふことの如きも、この満足の心から私の方が他へゆかんとするも行さなくなつて來るのであつて、決して行つてはならぬと力みてすることでは無いのである。

以上大分結果を申したことになるのであるが、私は從來結果の方は餘り言はぬことに致して居つたのであつた。併し何うも宗教としてもつと實人生に響かんならぬことが、今日は何餘りに響いて居らぬ。即ちその意味で申したのであつたが、それ丈け話が説明風になつたやうである。くどいやうであるが、若しこの慈悲ましまさずば、私共現今の一日一日が安じて暮させて貰へぬ處のお慈悲である。爾るに今この難有いお心であることを知らせて貰ふと、自分自身が初めて人生の五分々々を離れて喜ばせて貰へるばかりか、實に現今

世界の動亂の結局もこの慈悲で解決つけらるゝて無くば、本當で無いと思はして貰ふのである。それが必ず何等かの道行きて事實に起つて來なくてはならぬと思はして貰ふのである。それが何うなつて起つて來るかそれは分らぬ……。併しこれは決して世の所謂非戰論的の考えては無いのである。寧ろ實際的に實人生の上に實業をやり商業をやり……。何處も實際的にやつてゆく上にそれが起つて來ると思はして貰ふのである。現に聖人の和讃にも

像末五濁の世となりて、釋迦の遺教かくれしむ、彌陀の悲願ひろまりて、念佛往生さかりなり。

歎 異 鈔 講 義

近 角 常 觀

第十三章 (續)

具縛凡愚屠沽下類と二十一箇條張文

うみかには、あみをひき、つりをして世をわたるものも、野やまにしゝをかり、鳥をとりにのちをつくともからも、あきなひをもし、田畑をつくりてすくひとも、たゞおなじことなり、さるべき業縁のもよほせば、いかなるふるまひもすべしとは、如何にも痛切我等の胸をえいり去らるゝ貴き御教化である、こゝにかき並べられたる種々の人生生活は、たゞ何氣なく書き上げられたる様なれども、聖人の御言は愚禿すゝむるところさらに私なして、必ず御よりどころがある、是は言ふまでもなく、信卷本の終に引用したまひたる元照律師の阿彌陀經の疏の文が源である、曰く
念佛法門不簡愚智豪賤二不論久近善惡唯取決誓猛信隨終惡相十念往生此乃具縛凡愚屠沽下類、刹那超越成佛之法可謂世間甚難信也
唯信鈔文意に、聖人自ら此文を釋したまふてある、但使廻心多念佛、能令瓦礫變成金の文意に曰く
但使廻心多念佛といふは、但使廻心はひとへに廻心

三學六度の釋迦の遺教ではいけなくなつた時に當りて彌陀の本願彌々盛んであるとのお言葉である。即ちこの人生が復雜になればなる程、彌々起つて來る處のお慈悲である。併しそれは人生迷ひの根が切られて、相對界を離れられる處がなくてはいかぬ。全體この際世界の變局は結局何うなるものか。私のは決して戰ふ勿れと言ふので無い。戰ふのは大に戰ふのであるが、併しそれはこの廣大の御眞實の上よりゆくやうに有り度いと云ふのである。我々は戰ふ可きには大に戰へる。何故とならばその仕方の無いそこを見て下さる、廣大の御慈悲に充分安んぜさせて頂いて居るからである。己上。

せしめよといふことはなり、廻心といふは、自力の心をひるかへしつるをいふなり、實報土にむまるゝひとは、かならず無碍光佛の心中にあさまめとりたまふゆへに、金剛の信念となるなり、このゆへに多念佛とまふすなり、多は大的のこゝろなり、勝のこゝろなり、増上のこゝろなり、大はおほきなり、勝はすくれたり、よろつの善にすくれたるなり、これすなはち他力本願のゆへなり、自力のこゝろをすつといふは、やう／＼さま／＼の大小の聖人善惡の凡夫の、みつからが身をよしとおもふこゝろをすて、身をたのます、あしきこゝろをさかしくかへりみず、またひとをあしよしとおもふこゝろをすて、ひとすちに具縛の凡夫、屠沽の下類、無碍光佛の不可思議の誓願廣大智慧の名號を信樂すれば、煩惱を具足しながら、無上大涅槃にいたるなり、具縛といふは、よろづの煩惱にしばられたるわれらなり、煩は身をわづらはす、惱はこゝろをなやますといふ、屠はよ

ろづのいきたるものをころし、ほふるもの、これは
獵師といふものなり、清はよろづのものをうりかふ
ものなり、これはあきひとなり、これらを下類と
いふなり、かやうのあしきひと獵師さまのものは
は、みないしかはらつづてのことくなるわれらなり、
能令瓦礫變成金といふは、能はよくといふ、令はせ
しむといふ、瓦はかはらといふ、礫はつづてといふ、
變成金は變成はかへなすといふ、金はこがねといふ、
如來の本願を信ずれば、かはらつづてのごとくなる
われらをこがねにかへなさしむとたとへたまへるな
り、あきひと獵師などは、いしかはら、つづてのごと
くなるを、如來攝取のひかりにおさめとりたまひて
すてたまはず、これひとへにまことの信心のゆへな
ればなりとしるべし、攝取のひかりとまふすは、無
碍光佛の御こころのうちににおさめとりたまふゆへ
に、金剛の信心とまふすなり。

聖人の御教化に接し奉るときは、一面には我等が淺さ
想起せずには居られぬ、實に强者伏弱、轉相尅賊、殘害
殺戮、迭相吞噬の世界である、而して實に是れ現に歐洲
動亂の真相ではないか、さるべき業縁の催せば此の如
き尅賊吞噬の世界を實現するのである、心口各異、言
念無實、佞諂不忠、巧言諛媚、主上不明、任用臣下、
臣下自在、機僞多端といひ、郷黨市里、愚民野人、轉共
從事、更相利害、忿成怨結、富有慳惜、不肯施與、愛
寶貪重、心勞身苦といひ、如何にも露國革命の有様を豫
言されたるが如くある、其他但念姦嫉、煩滿胸中、愛欲
交亂、坐起不安といひ、不孝二親、輕慢師長、朋友無信、
難得誠實といひ、心中閉塞、意不開解、大命將終、悔懼交
至といひ、一々現代生活の有様を歴々と描き出された
如くである、相對有碍の抵抗争闘の生活は何時してし
あるべきとも見へぬのである、さるべき業縁の催うせ
ば實に如何なる振舞もするやうになるのである、此
の如き五惡五痛の人生をあはれみたまひて、如來無
碍の御力を以て飽までも罪を融かし、業を和らげて救

ましき罪惡の極を餘地なく示したまひて、如何にも底
下の凡愚、瓦礫卑賤の機類を示したまひて、一面には
如來攝取の光明は、毫も大小の聖人善惡の凡夫を備ひ
たまはざる至極を示したまひ、自らよしあしとおもふ
可からず、又我身の善を頼むべからず、惡をさかしく
顧るべからず、又他人に對して是非善惡の沙汰をして
心にだもよしあしのおもひをとむべからずと、一點
善惡自力のはからひを挟まぬやう餘蘊なく示したまひ
て、遂にはさるべき業縁のしようせはいかなるふるま
ひもすべしとぞて仰せらるるのである、是は如何なる
振舞をもして可いといふ勝手の意味ではない、業縁の
催せば如何なる振舞をするのも止むべからずと、寧ろ
如來の本願はかくまでも我等が業縁の催しを御覽下さ
れし、如來無碍の御心を示して下されたのである。

さるべき業縁の催せば如何なる振舞をもすべしと
は、實に相對争闘の抵抗的の人生々活を極端に御示し下
されし御教訓である、此に至りて大經五惡段の御文を
ひたまふのである、盡十方の無碍光は、無明のやみを
てらしつゝ、一念歡喜するひとを、かならず滅度に
たらしむ、無碍光の利益より、威德廣大の信をえて、
かならず煩惱のこぼりとけ、すなはち菩提のみつとな
る、罪障功徳の體となる、氷と水の如くにて、氷多き
に水多し、障多きに徳多し、いかなる振舞をなす逆惡
謗法の徒も、此の如き無碍光佛の不可思議の力に融か
されて、煩惱を具足しながら無上涅槃にいたらしめた
まふのである。

かくの如く聖人はおほせさふらひしに、當時は後世
者ぶりして、よからんものばかり念佛まうすべきやう
におもひ、あるひは道場にはりふみをして、なん／＼の
ことしたらんものをば道場へいるべからずなどいふ
こと、ひとへに賢善精進の相をばかにしめして、うち
には虚假をいたけるものかとは、嘗て序論にも詳細に
論じたる通り、放縱主義に對立して起れる、律法主義
の弊害を痛言したるものである、道場へ張文をしてな

ん／＼のことしたらんものをば道場へ入るべからずといふたのは、高田淨興寺に傳ふる所の二十一箇條張文の如きものをいふのであらう、是は嘗て求道第三卷第二號に於て掲載したる所なれども、大層久しき前の事故に再録してみよふ、曰く、

專修念佛御張文日記事

先師傳受之手法事

從愚禿親鸞聖人善性聖人集記也法性法師傳受令

披見一箇可令信者也

一 不可諸法誹謗

一 縱雖寫賜聖教並師判於背師說之輩者有

衆徒之定須所傳聖教被悔還

一 於修學二道互不可有遍執

一 以無智身不可好評論

一 不勘是非私不可勘當弟子事

一 未傳師說輩私說邪義揚師匠惡名事尤可留之

- 一 於念佛門一生十惡五逆信知而不可犯小罪
 - 一 於無智身戲論諍論之處可遠離百山句
 - 一 可留船大乘
 - 一 張夜道可留獨行
 - 一 不可輕慢師長師長者愚禿抄上可見仁邪也
 - 一 付諸事不可難人
 - 一 念佛行者以造惡身與諸佛如來同旨不可稱
 - 一 實買人偷并牛馬可留口入
 - 一 可留讒言中言虛言
 - 一 可留他人妻女懷犯事
 - 一 可留諸博奕雙六
 - 一 念佛勤行之日男女不可同座
 - 一 同勤行之日不可食魚鳥並五辛同勤行日可留酒狂
 - 一 忌者可隨其所主忌給
- 已前二十一箇條甄錄如是堅守此法敢不可違獨於不用此制法之輩者宜經衆徒之僉議可

被停放衆中者也抑書置此誓文事者如新選五念門註論及不違先師作以願力成就之五念門依傳知識成就之意趣

正嘉年中依此論信心疎者出來各令偏執之刻

自古聖人所給御消息重令披見處得無上覺悟

佛與佛御計也更不有行者計無義承侯此人

々一切不知事候云和之以字寫漢之字

此の如き律法主義を主張したる巨擘は善性房であつたと見える、そして此張文が聖人の直作にあらざること、劈頭の書出しによりて明らかである、即從愚禿親鸞聖人善性聖人集記也とあるによりて、もと／＼親鸞聖人の時々御話なされたるものを、善性聖人が集記せられたるものらしい、夫を法性法師が傳受して、段々手次／＼と傳受したるものらしい、故に先師傳受之手法事とある次第である、是によりて明らかに此二十一箇條は律法主義の人が之を道場へ張出して、堅く此法を守らねばならぬこととして、結文にもある通り此制法

を用ゐざる輩に於ては、宜しく衆徒の僉議を経て、衆中を停放せらるべきものといふのである、歎異鈔の著者はひとへに賢善精進の相をほかにしめして、うちには虚假をいだけるものと、痛論するも如何にも尤次第のことである。

然れども張文主張者に於ても、たとひ親鸞聖人の筆にあらざるも、畢竟聖人並に先師の作として差支なきものであるといふ主張らしい、其例として新選五念門の如しといふてある、是恐くは二門偈の事であらう、二門偈には淨土論及註論に於ては、行者所修の五念門を法藏菩薩の所修であるとして、願力成就名五念と主張してある、夫と同様にたとひ親鸞聖人及先師の筆に成りたるものならざるも、畢竟聖人及先師より傳受したるものなれば、願力成就と同様に知識成就といふてよいとの主張らしい、何れにしても随分文章といひ、議論といひ餘程文旨に出來て居る。

猶正嘉年中此に反對して放縱を主張したるものが出

て來たゆへに、古聖人より給はりたる御消息を重ねて
披見して見るに、佛と佛との御計にて行者の計にあら
ず、義なきを義とすとこそ承り候へ、此人々は一切承ら
ざる事に候といふて、此反對者を退けたるものらしい、
此御消息といふは、親鸞聖人血脈文集に載りてある消
息らしい、すべて此文集に載録せる消息は放縱主義者
に對抗する證文と見える、必しも律法主義者の主張に
利益なる御教化にはあらざるも、單に放縱主義者を退
くる便宜に供へたるものらしい、念のために引用して
みよう

むさしよりとて、しむしの入道どのとまふす人と、
正念房とまふす人の、大番にのぼせたまひおはし
まして候、みまひらせて候、御念佛のこゝろさし、
おはしますとおほへ候へば、ことにうれしう、めて
たう、おほへ候、かへすくうれしう、あはれに候、
なほくよくくすゝめまひらせて、信かねらぬや
うに、人々にまふさせたまふべし、如來の御ちかひ

のうへに、釋尊の御ことなり、また十方恒沙の諸佛の
御證誠なり、信心はかはらじとおもひ候へども、様
々にさこへたり、詮するところは方便の御誓願と信
じまひらせて候、念佛往生の願は、如來の往相廻向
の正業正因なりとみへて候、まことの信心ある人は
等正覺の彌勒とひとしければ、如來とひとしとも、
諸佛のほめさせたまひたりとこそさこへ候、また彌
陀の本願を信じ候するうへには、義なきを義とすと
こそ、大師聖人のおほせにて候へ、かやうに義の候
らんかぎりは、他力にはあらず、自力なりとさこへ
て候、他力とまふすは、また佛智不思議にて候なる
ときは、煩惱具足の凡夫の無上覺のさとりをえ候な
ることは佛と佛との御はからひなり、さらに行者の
はからひにあらず、しかれば義なきを義とすと候な
り、この人々のおほせのやうは、これには、つやく
としらぬことにて候へば、とかくにかはりあはせ
たまひて候こと、ことになげきおもひ候、よくくす

ゝめまゐらせたまふべく候、あなかしこく

九月七日

親鸞在判

性信御房

念佛のあひだのことゆへに、御沙汰どもの様々にさ
こへ候に、こゝろやすくならせたまひて、このひと
くの御ものがたり候へば、ことにめでたう、うれ
しう候、なにごとくくまふしつくしがたく候、い
のち候はゝまたくまうすべく候

畢竟放縱主義者に對する批難のために引用したらし
い、決して此二十一箇條の主張を助くるものではない、
全體此律法主義は放縱主義に反對して起りたるもの
なれば、自分としては正義を主張したつもりである、
されど其内容を檢するに、明らかに聖人の御本意に正
反對になりたるものもある、二十一箇條の一々につき
て論するも繁雜に過ぐるを以て、主要なるものにつぎ
て論してみよう。

第二條の師説に背く輩は傳ふる所の聖教を悔返さる

べしといふは、口傳鈔上六章にある新堤の信樂坊が聖
人の突鼻にあづかりて、聖人の御傍を去るとき、蓮位
房が御名のりたる聖教をとりかへさんと申したる
とき、聖人が本尊聖教は如來の流通物なれば、世間の財物
の如くにとりかへすべからずと仰せられたのである、
して見れば此の條は聖人の仰とは反對になつてある、
されど本文には衆徒の義定あつてといふ言が加つてあ
る、聖人はたとひ此の如く寛大に仰せられても、弟子中
の決議を以て取返へすべしといふと、要するに律法主
義に陥りて、聖人が、親鸞が名字ののりたるを、法師に
くければ袈裟さへの風情にて、いとひおもふによりて、
たとひかの聖教を山野にすつとも、そのところの有情
群類かの聖教にすくはれて、ことくくその益をうべ
しと仰せられたる眞意を解するところが出來ぬのである、
特に改邪抄本六章には正反對に「談義かたるとなづけ
て、同行智識に鋒楯のとき、あかむるところの本尊聖教
をうばひとり奉まつるいはれなき事」と示されてある。

第五條の是非を勘へず私に弟子を勘當すべからざる事といふは、歎異鈔、口傳鈔、改邪抄等に合ふやうである、併親鸞は弟子一人もたずといふ徹底的な立場より來らずに、道德的に横暴な態度を止めたものらしい、よつて是非を勘へずと條件付らしい。

第七條に念佛門に於て十惡五逆生ると信知して、而も小罪をも犯すべからずといふは、恰も正反對に口傳鈔下終より二章に堂々と正面より攻撃されたる箇條にして、同聖人のおほせとて、先師信上人のおほせにはく、世のひとつねにおもへらく、小罪なりとも、つみをおそれおもひて、とどめばやとおもはゞこゝろにまかせてとどめられ、善根は修し行せんとおもはゞたくなりぬべしと、この條眞宗の肝要にそむき、先哲の口授に違せり乃至これも抑止門のこゝろか、抑止は釋尊の方便なり、眞宗の落居は彌陀の本願にさはまる云云、如何に二十一箇條の三代傳持の眞隨に違かるかを

徴すべきである。

第九條 船の大乗を留むべしといふが如きは、聊か了解に苦む位である、併蓮如上人御一代聞書二百九十一條に曰く

開山聖人の御代高田の二代顯智上洛の時申され候、今度は既に御目にかゝるまじきと存候處に、不思議に御目にかゝり候と申され候へば、それはいかにと仰られ候、舟路に難風にあひ迷惑仕候由申され候、聖人仰られ候、それならば船にはのらるまじきものと仰られ候、その後御詞の末にて候とて一期舟にのられず候、又昔に醉申され御目に遅くかゝられ候し時もかくのごとく仰られしとて、一期受用なく候しと云云、かやうに仰を信じちかへ申すまじきと存せられ候事、誠にありがたき殊勝の覺悟との義に候かくの如き事實の傳聞から船の大乗を留むべしなどいふ箇條を生じたるにや滑稽至極といふべし、併顯智大徳の如きは律法に囚はれたのではない、寧ろ信仰の上

より自然に流露せる自發的道德といふべきである、然るに之を箇條として決議したなど、如何に信仰の根源の枯渴せるかを見るべきである。

其他何れも當時一部の放縱主義の弊害に對する律法的矯正の意思を示して居る、歎異抄著者の批評の如く、偏に賢善精進の相を外に示して内には虚假を懐ける偽善者流である、此に至りて再び唯信鈔文意の御釋を拜讀すべきである、曰く

不得外現賢善精進之相といふは、淨土をねがふひとは、あらはに、かしこきすがた、善人のかたちをふるまはされ、精進なるすがたをしめすことなかれとなり、そのゆへは内懷虚假なればなり、内はうちといふ、こゝろのうちに煩惱を具せるゆへに虚なり、假なり、虚はむなしく實ならず、假はかりにして眞ならず、しかれはいまこの世を如來のみにて末法惡世とさためたまへるゆへは、一切有情まことのこゝろなくして、師長を輕慢し、父母に孝せず、朋友

に信なくして、惡のみこのむゆへに、世間出世みな、心口各異言念無實なりと申しへたまへり、心口各異といふは、こゝろとくちにいふこと、みなおのゝこととなり、言念無實といふは、ことはと、こゝろのうちと、實なしといふなり、實はまことといふことはなり、この世のひとつは無實のこゝろのみにして、淨土をねがふひとはいつはりへつらひのこゝろのみなりときこへたり、世をすつるも名のこゝろ、利のこゝろをさきとするなり、しかれば善人にもあらず、賢人にもあらず、精進のこゝろもなし、懈怠のこゝろのみにして、うちみはむなしく、いつはりへつらうこゝろのみつねにして、まことなるこゝろなき身とするべし、斟酌すべしといふは、このありさまにしたかひてはからふべしといふことはなり、

此の如く前に擧げたる五惡五痛の文を毫も抑止律法の意味を加へず、其儘直ちに我等が心のありさまとして

心口各異言念無實なものなりと懺悔したまふ、げにさるべき業縁の催せば如何なる振舞をもすべしといふがこゝである。

かくまで深き無碍光佛の本願不思議をきけば、如何なる罪業も滅ぶべきと思へるに、猶却て願にほだされて罪を作るものがあれば、夫が矢張宿業の催すゆゑへである、されば、善てあれ、悪てあれ偏に宿業にまかせて、自分の力にては一分一厘も如何ともすべからざる有様を觀をなはして、飽まで見捨てたまはざる本願の眞實をいたゞいて見れば、地獄であらうが淨土であらうが全然御眞實にまかせたてまつりて、一點も疑ふ餘地なき有様を他力不思議といふのである、こゝを「願にほこりて作らん罪も宿業の催すゆゑなり、さればよきこともあしきとも業報にまかせて、ひとへに本願をたのみまゐらすればこそ他力にてはさふらへ」と結ばれたるものである、此の如き本願眞實の他力不思議あればこそ、現代の如き歐洲動亂、露國革命、強者伏弱、

殘害殺戮の如き業縁の催しも、無碍光佛の加威力に救はれて、不斷煩惱得涅槃の結果を持來するのである、實に不可稱不可説不可思議の極と讃仰するの外はない。

信仰書簡

老兄

とう／＼往きました。病症がわかつてから半歳餘になりました、しみ／＼となごもを惜ませてもらひました。

が、遂になごりはつきませんでした、妻の死ぬ數日前のことでした、急に今迄に覺へぬ胸ぐるしさを感ずると、これが臨終ならんと申し、傍に居た私の腕をひしとわが胸にいだき、枕頭に待たぬ娘に向ひ、一つ二つ心得となるべきことを云ひさかしましたときは、一滴の涙が頬を傳はりました、水をとつて身神ともに樂になつてからは、どうかこのらくのうちにはやく往きたいとよく言つたものでしたが、その當時は氣

つきませんでした、今になつてその有様を思ひうかべますと、あれが即なごりおしくおもへとも娑婆の縁つきて力なくして終るときであつたと思ひます。しかしその時は幸におちつきまして、病人はまだ死ぬなかつたとわらひながら申したことであります。

その頃のことでしたせう、老兄に名をつけていたゞきたいとおねがひしましたのは。

おもへば不思議です、私とその手紙をかきましたのは夜半のことでしたが、何か心せくまゝに、ありあはせの二錢の切手を二枚をはつて、すぐせがれをやつて投函させたのであります、老兄が私の手紙を見て、電話で御願ひ下さつたのは、淺草御立の前僅に數分であつたとおつしやるてはありませんか、もし私が翌朝投函させたなら少くも一便はおくれますから、到底生前に臺下より法名をいたゞくことはなかつたせう、臺下は恐らく御歸浴後、萬事を抛擲せられて、直に御見舞狀、并びに法名を認めおくらせられたこと、おもひます、而してこの御親翰と法名とをいたゞいたのが朝で、その夕が臨終であつたとは、あゝ、何たるありがたき御はからひでせう。

御教書をいたゞきましたとき、私はじめ一家のものは踊躍歡喜しました、病妻は諸根悅豫の體でした、午後婦者が見へまして、今日は衰弱は幾分増して居るにかゝはらず、非常に元氣がよろしいやうに見受けるので、不思議がつて居られましたので、私が實は今日はいれ／＼のことがあつて大變よろこんでゐると申ましたら、それこそと申されたやうな次第で、何のことはない、一家はさほもなき法身の光輪につゝまれてらされた光景でした。

私は妻に言ひました、お前はこの頃「もう、しておきたいとおもふことも、出来るだけ、して仕舞つたから、何もおもひのこすところははない、どうぞ身體の樂なうちに往きたいもの」とよくいふが、私は夫として父として一日も長くゐてもらひたかつた、しかしけふといふけふは、ありがたい御消息をいたゞき法名までも賜つた、願てもない幸に遇はせていたゞいたのであるから、御前は猶更のことであらうし、私も今はおもひおくことがなくなつた、實に百萬の富をいたゞいたよりありがたいことで、もういつなん時往つてもいゝよと申しましたら、妻も大によろこびまして、こんな

うれしいことはない、どうぞ御書を大切に保存して下さいといくれくも申しました。

どうでせう、苦惱の有情をすてたまはざる浄土の慈悲の御心の發動は、我等夫妻をして、今生の哀別離苦をさへ忘れしめ、たちかたき恩愛の絆をすぐたゝれました、あゝ、何たる偉大な御力でせう。

そのゆゑでございまして、妻は病床に身を起させまして庭の面をながめながら、氷じることを目の前でこしらへさせていたとききました、(死ぬ前には氷じることをたばさせてもらふと、数日前に言つたことがありました、後に思ふとその通りになつたのです)たゞ終りまして、あゝあゝしかつた、ねかしてもらひませう、といつて、横になるや、間もなく咽喉部に妙な喘々といふ音がきこへましたので、私は變におもつて、どうしたといひますと、樂ですと答へましたので、それでもなんだかこゝに(咽喉に手をふれて)妙な音がするではないかと重ねて申しますと、妻は從容として、これが臨終でせうと申しまして、嚔を迎へにやるのもとめた位でした、それからは種々に手を盡しましたが、その甲斐なく翌朝四時頃に息を引取りました。

あゝ、亡妻は私と共に長らくの間親身も及ばぬ御世話を老兄からいたゞきました、亡妻は生前老兄の御親切に感泣して居りました、謹んで御禮申し上げます。御親翰の中にある「去りながら人の世は皆春の雪」といふ句と、老兄の御來示の御示し下された「戀しくは南無阿彌陀佛を唱ふべし、われも六字のうちをこすめ」の歌は、私の此頃しばしば口誦むところであります。

妻の病症がわかつてから持前の筆ぶしやうも幾分直つたやうでしたが、亡くなりましてからは、まだ手紙もかけません、先日

臺下に御禮狀を差出しましたのと、これが二本目です、猶申上げたいことは盡きませぬが、次便に譲ります、乍筆末奥様へよろしく

大正七年五月三十一日夜

池山榮吉頓首

前月號は休刊しました。又本月號は小供の不幸に支えられて匆卒の間に作りましたので、頁數もいつもより數頁不足して居りますことをお詫言ひ申します。

第八回夏季求道會

時 日 六月三十日ヨリ七月七日マテ八日間

毎朝午前八時ヨリ

講 話

毎夕午後七時ヨリ

信仰談話會

講 題

- 一、親鸞聖人『教行信證』行卷の終の部分より『正信偈』
- 一、思想問題と信仰

近 角 常 觀

本年は親鸞聖人の信仰啓白として何人も日夕諷誦せる『正信偈』を講本として鑽仰愛樂せんと欲す、直截簡明聖人の信仰を味はんとするもの、此偈を措て何をか求めん

來 聽 隨 意

本郷區森川町一番地
電話小石川一六四一番

求 道 會 館

近角常觀著

信仰之餘瀝

第三十版
定價卅五錢
改正價四錢

信仰問題

第四版
定價七十五錢
改正價六錢

歎異鈔

第七版
定價五十三錢
郵稅三錢

信仰之余瀝要略

第四版
定價五十三錢
郵稅三錢

この要略は「信仰之余瀝」中の主要なる數篇を選び、
施本用としてこしらえました。「歎異鈔」と共に、御
求めの部數に應じ割引を致します

東京市木郷區森川町一
振替口座東京一六六九六番
求道發行所

求道發行所委託大正七年三月八日第三種郵便物認可

講 話

每日曜午前九時
每月十五日午前九時愛信會
每月廿八日午後七時聖會

每日曜午後二時
〔木郷區森川町一番地〕

第二 求道會
〔九段坂佛敎俱樂部〕

每月二十七日午後七時
〔日本橋區湯町設敎所〕

第三 求道會

每日曜午前八時
〔求道會館〕

日 曜 學 校

●本誌は毎月一回十五日發行とす●誌代は總て前金御拂込みのこ
と●送金は成るべく振替にやらせし●郵便爲替の場合には振替
局は本郷區森川町局宛のこと●郵券代用は一刻増●宛名人は凡て
求道發行所のこと

定價一部十四錢 六ヶ月分 八十錢 郵税不要
三ヶ月分 壹圓五十錢

大正七年六月十二日印刷
大正七年六月十五日發行

發行所

編輯人 近角常觀
印刷人 近角幸音
東京市木郷區森川町一番地

求道發行所

電話(小石川一六四一番)振替(東京一六六九六番)